

CoCシナリオ「蒼のカテドラル」ログ

佐渡山 創

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『君』を思い出せるヒントは、ありましたか。

原作：あいら様

クトゥルフ神話COCシナリオ「蒼のカテドラル」

リンク：<https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=10157477#1>

※このシナリオを回した時のログを小説風にしてみました。
オリジナル探索者が登場します。

目次

第1話：健康調査	1
第2話：自己紹介	8
第3話：繁華街	12
第4話：区立図書館	19
第5話：浜辺	24
第6話：ゲームセンター	29
第7話：接触	36
第8話：BAR	42
第9話：汐留工業所	50
第10話：マール大聖堂	60
第11話：蒼のカテドラル	68
第12話：エピソード	73

第1話：健康調査

「健康調査……ですか」

「そうなんだ。国からのお達しらしくてねえ……なので、午前中は臨時休業としまーす」

電話越しに店長の声を聞きながら、俺は軽くため息をついた。本日は夏休みも真っ只中、8月の11日。今月も折り返し地点で、バイトにますます精を出そうとした矢先。臨時休業の知らせに、俺は肩透かしを食らった気分になった。

「にしても、かなり急ですね。他の皆も今日は休みですか？」

「そうだよー。という訳で、高山も健康診断に行つて来な。ああ、費用はこちら持ちだから安心してくれ」

店長の話だと、行かないと罰則があるのだとか。まあ、国からの指示ならば仕方ないだろう。そう思い、俺は近くの病院へと向かった。



病院のロビーに入ると、そこには既に多くの人が集まっていた。手にハガキなどを持ってしている人もいるし、これは全員健康調査を受けに来た人たちなのだろう。

「すごい人が多いな……きつき表にパトカーまで停まっていたし」

あの黒と白で塗られた車両は嫌でも目立つ。警察官まで来ているということは、本当に国民全員が調査対象なんだな……。

他に知り合いは来ていないだろうか。辺りを見回してみても、それらしき姿は見えない。

「……ん、あれ？」

人混みの中に紛れて、一回り背の低い、見知った髪型が見えた気がした……が、すぐに隠れてしまう。

「一ノ瀬さん…？見間違いかな」

一ノ瀬夏凜。俺のバイト先の同僚で、同じ高校に通っている。話した事はほぼなかったが、バイトを初めてから少しは会話を交わすようになった。……のかな？同じ職場で働き初めてから3ヶ月。未だに彼女との距離が掴めないでいる……。

そんな事を考えていたら、受付の順番が回ってきた。持っているハガキを提示すると、検査着とディスプレイが付いたチヨーカーのような物を渡された。

「あの、これ何ですか？」

「今回の検査から、個人情報や検査結果などを全てこちらのチヨーカーに読み込ませていきます。首に巻いて、ディスプレイ側を後ろに着けてくださいね」

「分かりました…なぜ首に？」

「ディスプレイに医者間でのやり取りの情報が写し出されますので、患者様には見えない方式になっています…まだ試験的運用の段階なんですけれどね」

そう言つて、受付の人は申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

更衣室に入り、俺は検査着に着替える。そして、貰ったチヨーカーを言われた通りにディスプレイを後ろにして首に着けた。カチツと、ロック音が鳴る。

「検査が終わると外れるのかな……。」

着けたはいいが、外し方を聞き忘れていた。多分検査終了と同時に病院側に返却するのだろうが、もし外れなかったらどうしよう…。

「次の方、どうぞー」

チヨーカーをいじっていると、検査の順番が回ってきたようだった。パンフレットの検査項目は、血液検査や血圧測定、眼科検診や脳波測定など多岐に渡る。検査を受け初めて数項目、次は心電図測定だった。

「ゆっくり呼吸して、3分間目を閉じていてくださいね〜」

心電計が規則正しく音を鳴らす、薄暗い部屋の中。

こういう検診は少なからず緊張するが、どうやら少し気が緩んでし

まっていたらしい。

いつの間にか計測器の音が遠くなり、俺は次第に意識を手放していった。



「……。」

目を覚ますと、俺は椅子に座っていた。

辺りを見回すと、小さな会議室のような部屋で椅子が設置されており、俺の他にも何人か座っているようだ。

「……あれ、俺確か心電図の検査で……」

どうやら検査中に寝落ちしてしまっていたらしい。医療スタッフの方にここまで連れて来られたのだろうか、少し後ろめたさを感じた。となると、ここは休憩室として使われているのだろうか。

そして、いつの間に着替えたのか、俺は検査着ではなく、病院に来たときに着ていた黒いパーカー姿になっていた。首元を触ってみるが、まだチョーカーが付けられている。

果たして、検査は終わったのか、終わっていないのか。

もう一度辺りを見渡すと、今度は椅子に座っている人影がはっきり分かる。

跳ねた髪をバンダナでまとめた青年。

長い銀髪が特徴的な少女。

目付きが悪く、カーキ色のモッズコートを羽織った男性。

今この会議室に居るのは、俺を含めてこの4人みだ。しかし、面識はない。どういう基準でここにいるのだろう。俺と同じように

検査中に眠ってしまったのだろうか。

不意に、目の前の大きなスクリーンに明かりが灯る。映し出されたのは、見覚えのない男性の姿だった。黒い髪をオールバックにして、白衣を着ている。この病院の医者なのだろうか。

そして、天井に備え付けられているスピーカーから声が発せられた。

「お目覚めかな。手荒な真似をして済まなかった。実は、君達に協力して欲しい事があるんだ……まあ、拒否権はないのだがね」

「…ああん、協力？ テメエ何物だよ」

先ほどの目付きが悪い男が食ってかかった。…うわあ、見た目の通り性格悪そう……。

「私は徒那伊月あだな いつき。見ての通り、研究者だ」

「研究者……」

銀髪の少女が、ぼそりと呟く。

彼は淡々と、しかしどこか面倒くさそうに二の句を継いだ。

「君達は、近頃巷を賑わせている『青涙病』を知っているかね？」

俺が一番近くにいた、バンダナの青年と顔を見合わせてから答える。

「いえ、聞いたことないです……」

「まあ、君達程度の若者ならそうだろうな。青涙病は、世間では罹患者は30名程度……などと報道されているが、あれは嘘だ。実際には200名以上の罹患者が出ていて、罹患したが最後、その致死率は100%だ」

「100%……。ひよつとして、その病気を治すために、俺たちは集められたんですか？」

「察しが良くて助かる。その通り、君達にも調査に協力して欲しくてね。ああ、ちなみに私の肩書きは『青涙病対策研究所』の所長だ」
徒那が言い終わった瞬間、大きな破裂音のようなものが耳をつんざいた。俺はたまらず耳を塞ぎ、縮こまる。

音のした方向を見ると、先ほどの目付きが悪い男が立っていた。その手には——拳銃が握られており、銃口から薄く、煙がたなび

いている。

う、嘘だろ!? モデルガン…じゃないよな、あの音。撃ったのか? 実銃を…? ここは平和の国日本だぞ…!?

「さっきから黙って聞いてりゃあガタガタと抜かしやがってよお…! おいテメエ!! なんで俺がそんな事に協力しなけりゃなんねえんだ ああん!?”

彼は拳銃を片手に持ち、鬼のような形相でスクリーンに詰め寄った。しかし、徒那は眉一つ動かさずに悠然と構えている。

「…何故、君達が協力しなければならぬのか。答えは簡単だ。本日の検査で、君達は全員青涙病に感染している事が判明したからだ。」

「なん…だつて…?」

「ち、ちよつと待つて下さい。僕たちがその病気だというのなら、数日前から事前に何かしらの不調が出てないとおかしいはずですが」

そこで、バンダナの青年が一步前が出る。言っていることはもつともだ。

徒那はまたも無表情で、続ける。

「いや。とにかく君達は青涙病に罹っている。しかも、進行具合からして持つてあと3日。感謝したまえよ、諸君。私は君達が貢献してくれたらその病気を『治してやろう』と考えている」

それは、突然すぎる死亡宣告だった。

あと、3日。

あと3日で、俺は死ぬのか。

こんなにあっけなく?

現実感がなさすぎて、俺は頭がからっぽになり、その場に膝をつく。

しかし、他の3人はそれを聞いても狼狽えたりはせず、スクリーンの中の男を見据えている。

場馴れしてるな…。

素直に、そう思った。

「…ああ、言い忘れていたがそのチョーカー、無理に外そうとしたら、破壊を試みようとする」と爆発するから気を付けてくれたまえ。こ

れは政府にも承認された極秘の依頼だ。情報は秘匿してもらわねばな」

ますます、現実感が薄れていく。

爆発するチョーカーなんて、ドラマの中でしか見たことがない。

これは本当に、現実なのだろうか……夢じゃ、ないのか……？

沈黙が、場を支配する。

それを打ち破ったのは、銀髪の少女だった。

「分かった。お前に協力する。その代わり、私達の病気はちゃんと治してもらおう。いいな？」

「……フツ。では、頑張ってくれたまえよ。連絡は、その机の上にある携帯電話から行う。それと……もう一人、仲間を用意しておいたからせいぜい仲良くやることだな」

「君達の病気の進行度は、そのチョーカーから確認できる。君達が期待通りの成果を上げたら、そのチョーカーを外す。パスコードも教えてやろう」

「自分では見えないから、各自仲間に確認して貰うように。それでは、健闘を祈っている」

そこでスクリーンの明かりは消え、スピーカーも音を発しなくなつた。

「……っあああ！クソツ!!!」

さっきの目付きの悪い男が、再び銃を取り出す。そして、スクリーンの四隅に弾丸を撃ち込んだ。

俺は再び耳を押さええてうずくまる。……あの人、本気でヤバいのは？警察に通報した方がいいんじゃないだろうか……。

「ちよつと、その貴方！さっきから危ないですね、警察呼びますよ」
バンダナの青年が彼を制止しにかかる。しかし、拳銃を持った男は彼を舐めるように睨みつけると、何か手帳のようなものを取り出した。

その手帳は、よく見る旭日章がこれ見よがしに光っていた。

「警察は俺だが」

「……………はっ？」

俺もバンダナの青年も、本気で唾然とした。嘘だろ……こいつが警察とか、世も末だ…。

「……。誰か、入ってくるようだな」

その時、銀髪の少女が入り口の方を向いた。扉がスツと開く。入ってきた人物の姿に、俺は目を見張った。

「え……。一ノ瀬、さん……!?!」

「……。」

特徴的な黒髪。俺とほぼ変わらない身長。バイトで見知った彼女の姿が、そこにはあった。

第2話：自己紹介

「……………」

「一ノ瀬、さん……？なんでここに……」

「……私も、このチョコカー付けられたから。みんなと合流しろ、つて……徒那が」

扉を開けて入ってきたのは、俺の知り合いである一ノ瀬夏凜だった。普段、彼女とはあまり話さないが、事態が事態なだけにそうも言っていてられないだろう……。

「んだよ、テメーの知り合いか？」

目付きの悪い人に話しかけられる。少し、いやかなり話すの怖いけど、ここは気を張らなくては……。

「え？ああ、はい。同じバイト先で働いている一ノ瀬さんっていう人で……。」

「ああ、丁度よかったし自己紹介します？」

バンドナの青年が会話を繋げてくれる。こんな状況だし、確かに自己紹介は必須だろう。俺と一ノ瀬さんは知り合いだが、他の人は初対面だろうし……。

「それじゃ、言い出した僕から……。僕は珪水けいすい晶しょう。写真家やってます。」

バンドナの青年は珪水晶と名乗ったあと、軽くお辞儀をする。次の人に目を移すと、男は機嫌悪そうに目を逸らした。

「阿曇あづみ 爽雨そう。刑事サンって呼べ。ん」

そう言つて、目付きの悪い男——阿曇さんは先ほども出した警察手帳を見せる。そこには、旭日章の他に、名前や所属、顔写真が入っていた。

「本当に警察だったのか、お前」

「だからさつきからそう言つてんだろが。で？お前誰だよ」

刑事さんは、横に座っている銀髪の少女にガンを飛ばす。特に動じる様子もなく、少女は答えた。

「私はメア・ロワールという。フランス出身だ。日本語は喋れるが、ま

だまだ日本の文化には疎い。よろしく」

「けっこう日本語が堪能なんですネ…凄いい」

「そうだろう、私は天才だからな」

そう言つて、銀髪の少女……もとい、メアさんは胸を張つた。心なしかドヤ顔をしている気がする。

「お前パスポートは持つてんのか？最近不法入国者が多いからな」

「持つているが、入つているポーチを今は持つていない」

「あ？ウソつくくんじゃねえぞ、ウソだったら撃つ」

「物騒だなお前」

そんな紹介を横目に、俺は一ノ瀬さんに自己紹介するように促す。

「……私は、一ノ瀬 夏凜。高校生。よろしく」

短い自己紹介だったが、全員に伝わつたようで特に追及はなかつた。そして、全員が俺に注目する。

「高山 直人、高校生です。そこの一ノ瀬さんとは同じ高校で、バイト

先の同僚でもあります。宜しくお願ひします」

俺は生徒手帳を示しながら、お辞儀をした。

「……高山くん、同じ高校だつたつけ」

「覚えてないの!？」

「覚えてない」

「ええ……バイト入つた時、同じ高校つて話したじゃん!」

「おいガキ!ウソついてんのかア!？」

「いえっ滅相もない!!」

とりあえず、これで全員の名前は把握した。さて、ここからどうするかだけど……調べると言つたつて具体的に何をしたらいいのか、見当がつかない。他の4人を見渡してみても、まだ少しよそよそしい感じだ。

そんな時、沈黙を切り裂くように机の上の携帯電話が鳴つた。誰の携帯でもない、徒那から支給された端末だった。

「あー……とりあえず出ますね」

俺は端末の通話ボタンをタップすると、スピーカーモードにして皆に聞こえるようにした。声の主は予想通り、徒那のものだった。

「やあ、直通電話の調子は良好なようだね。……とりあえず、何をすれば良いのか分からないのならヒントをくれてやろう。まずは『カタリ』という人物を探してみろ。奴は裏社会の人間だ。政府側の我々が近づくのは容易ではない。」

「政府側」、という言葉に刑事さんが反応したような気がしたが、話に耳を傾ける。

『『カタリ』は青涙病の病原体……つまり”原体”の在り処を知っているらしい。早急に奴を、そして原体の在り処を探し出すように。では、宜しく』

そう言って、電話は切れた。

『カタリ』か……一体誰なんだろう?』

「それを見つけるんだろーがよ!……あークソ、あのオールバック次会ったらブタ箱ぶち込んでやる」

「とりあえず外に出られるようだ。出てみるのも一つの手ではある」

「そうですね……じゃあ、ロビーで合流って事で」

そう言って部屋から出ようとしたその時。

急に、頭に鈍痛が走った。思わずその場にうずくまる。皆の姿を確認してみると、他の人も同じようにうずくまっていた。

「……っ、なんだ、これ……。」

「手が、痺れてるな」

「チツ、これが病気の症状かよ」

「……ねえ、皆。他の人のチョーカーを見てあげて」

全員で確認し合うと、皆のチョーカーのディスプレイには「st a g e : 1」と出ているようだった。

「これは、病気の進度を表しているのか」

「まだ一番軽い症状みたいだね……」

「……で? 調査つつたつてどこ行くんだよ、俺この辺詳しくねーぞ」
「……警察官なのに。人が多いといえば繁華街だと思っけど」

「調べ物がしたいなら図書館ですかね。この辺りに、カフェが入ってる大きな図書館があるんですよ。あとは……穴場といえば海辺ですかね。地元の人から話が聞けるかも」

俺と一ノ瀬さんはこの辺りに住んでいるので、調査向きな箇所をいくつか挙げてみた。

「海、かあ…。」

「海に調査に行く？なら俺が案内するよ。全員で行くより、手分けした方が効率がいいかもだし。」

「本当!?じゃあ、お言葉に甘えられますか」

「よろしく、えーと…晶さん」

「うん、よろしく。」

「では、私は図書館に向かおう。何か情報が入手できるかもしれないしな」

メアさんは図書館に向かってくれようだった。そこで俺は自分の携帯を取り出し、全員分のLINEを交換し、グループを作成する事を提案した。

「んじゃ、俺は繁華街行って来る。捜査は足でするもんだ」

グループに参加するなり、刑事さんは踵を返して外に向かって行った。

「一ノ瀬さんはどうする？着いてくる？」

「…私、あの刑事さんに付いていく。なんか危なそうだから」

「い、一ノ瀬さん…大丈夫？慣れない人と一緒にいて…」

「たぶん、大丈夫」

これでグループ分けは決まったようだった。俺は一度、LINEに「何かあったら、連絡を下さい!」とメッセージを残しておいた。「よし、それじゃあ海辺に行こうか。ここからだとして少し歩くけど、そんなに遠い距離じゃないから」

「分かったよ。じゃあ高山君、案内よろしく」

俺と晶さんはどちらからともなく手を差し出し、握手を交わし合ったのだった。

第3話：繁華街

「……まさかパトカーとは」

昼の繁華街の景色が、前から後ろへ通り過ぎてゆく。

私——一ノ瀬夏凜は、パトカーに乗せられていた。いや、正確には自分から乗ったと言った方が正しい。こんな車両に乗っけては他人に見られた時にあらぬ誤解をされる可能性があるが、今は仕方がない。

私は、手分けして行動する事となった刑事と繁華街へ繰り出していた。なぜ、顔見知りである高山くんよりこの刑事と行動する事を選んだのか。何故だか分からないが、この刑事は放っておけない気がした……からだ。

「んでガキ?どこ行くんだよ」

「…ガキ扱いしないで。私、この辺り来たことあるけど『猫耳飯店』っていう中華のお店と『ウミガメ食堂』っていうレストラン。あと『海老名』って天ぷら屋さんが美味しいらしいよ」

「よく知ってるのな」

「ライバル店の動向は、知っておきたいしね」

「ふーん……着いたぞ」

刑事の運転するパトカーは、要望通り猫耳飯店の前で停車した。この刑事の事だから適当な店で停まりそうなものだったが、目星を付けた場所で停まってはくれるんだな。

私は助手席から降りると、一件目の店の暖簾をくぐった。

「ご注文、お決まりアルか?」

「小籠包」

席に座るなり、刑事は短く注文をした。店内を見渡してみるとまあまあ客が入っており、それなりに繁盛しているようだった。店の雰囲気も、古き良き食堂という感じで好感が持てる。

「お嬢サン、ご注文お決まりアルか?」

「あ…じゃあ、麻婆豆腐で」

「麻婆豆腐、俺も」

「アイヤー、分かったネ」

中国人らしき店員の娘は注文を聞くと奥に引っ込んでいく。しばらくして、料理が運ばれてきた。

「麻婆豆腐お待たせアル!」

「いただきます。……おいしい」

私は早速食べ始めたが、刑事は料理に箸を付けずに店員の様子を伺っている。

「なあお前、『カタリ』ってやつ知ってるか?裏の人間なんだと」

「カタリ?ウラの人間……?うーん、そういう詳しいの分からナイけど、『ユーマ』クンなら教えてくれそうネ」

「ユーマか。そいつは今どこにいる」

「シー、昼は何してるか分からないアルよ。でも夕方頃ならだいたいゲームセンターでたむろしてるはずネ」

「不良か……シバキに行くぞ」

小籠包と麻婆豆腐をもの数分で平らげた刑事は、早速店から出て行こうとした。

「待って。私まだ食べ終わってない」

「ったく、スローフードなんかクソ食らえだつての。おい店員!ここキヤツシユレス対応か!」

「申し訳ないアル、まだネ」

「チツ!…お前の分の勘定も置いてってやるから払って来い、先に車行ってるぜ」

札と小銭を机に叩きつけ、刑事は今度こそ店から出て行った。残された私は、一人で黙々と麻婆豆腐を食べる。辛すぎず、かと言って味が薄くもなく、甘党な私でも食べられる絶妙な味付けだった。

会計を済まし、外へ出る。パトカーの方へ近づくのは気が引けたが、奴が車の中に乗っている以上行かざるを得ない。

「……ちそうさまでした。それで、次どこ行くの」

「ゲーセン。不良シバキに行く」

「はあ……話聞いてた?その『ユーマ』とやらが現れるのは夕方ですよ。まだお昼過ぎ」

「んじやあどこ行くってんだよ!!」

「もう少し他の店に聞き込みしに行く。見当つけてる所は、まだある」
「しやあねえな…んじや、しっかり案内しろよ」

刑事はそう言うと、車のエンジンをかけた。



「ここか?二軒目」

刑事はパトカーから降りると、看板を見た。二軒目の店は『ウミガメ食堂』。様々なジャンルのメニューを取り揃えたレストランらしい。

早速店の中に入ると、やけに人が居た。それも、客層が片寄っており男性客が多い。壁のポスターを見てみると、どうやら本日は大食い対決なるイベントを開催しているらしく、そのせいだろうか。

「よ〜しやるぞ〜!!」

「……?」

何となしにカウンター席を見ると、いかにも食べそうな巨漢達に混ざって、丸眼鏡を掛けた白衣姿の小柄な女性が、スプーンを高らかに掲げ何やら騒いでいた。

そのまま眺めていると大食い対決が始まったらしく、皆思い思いに料理をかき込んでいた。その中でも目立つのが、さっきの小柄な女性。あの身体のどこに、大盛りの料理が入るスペースがあるのだろうか……

「……ん?あの人、私たちと同じチョーカーを着けてる…。」

ふと目に入った彼女の首元に、チョーカーが着いている。それは、私たちが着けているものと同じだった。

「ねえ、刑事さん……あの人」

「あー…分かってる。」

刑事は何を考えたのか、拳銃を取り出し天井に向けて発砲した。銃声が鳴り響き、店員も他の客も女性も、皆こちらの方を向いた。そしてそのまま警察手帳を掲げ、高らかに名乗りを上げる。

「警察だ!! えーと…その女! ちよつと来て貰おうか」

「…うん、何も分かってないね」

最悪だ。いつかやるとは思っていたが、こんな公衆の面前で銃をぶつ放すとは。私は極力距離を取り、他人のふりに徹することにした。

「ほえ…あたしですか? 別にいいですけど」

驚いたことに、女性は驚くそぶりも見せずホイホイと刑事に付いてゆく。私はパニツクにならないうちに、そつと店から出た。

彼女はパトカーの後部座席に乗せられ、そのまま事情聴取…もとい、聞き込みが始まった。

「おい、メモ取つとけ」

「…わかった。」

「お前名前は?」

「桃木 ももき 桃子 とうこ、研究者です。あ、ちなみに生物学と地質学専攻ですよお」

桃木と名乗った女性は、柔らかく微笑む。刑事はそれを受け流し、ズバツと要件を言った。

「単刀直入に聞く。『カタリ』って奴を知ってるか」

「あたり…ほえ? 誰ですかそれ?…って、そのチョーカー! もしかしてあなた達も徒那所長から原体の搜索を命じられてるんですか!？」

「は…? まあ、そうだけだよ」

「実は自分もその職員なんですけど、ドジって青涙病に感染しちゃって困ってたんですよ! えっへへ」

「お前アホだな」

この刑事にだけは言われたくないだろう。

「どの口が言う…」

「ああん何か言ったか!? ……他に知ってる事あったら、洗いざらいブ

チ撒けろ」

「ん〜知らないです！あ〜ブックレストのしろくま食べたいなあ〜
……あれ!!お昼休憩とつくに終わってる〜!そ、それじゃ私はこれで
!!……あつ、何か聞きたいことがあったらここに電話してください
!」

彼女は急に慌ただしくなると連絡先が書かれた紙を座席に残し、パ
トカーを飛び出しそのままどこかへ走っていった。

「オイちよつと待てや!……アイツ、使えねー!」

「次、行こっか」

「チツ!」

刑事は盛大な舌打ちをすると、不機嫌そうにアクセルを踏み、車を
出した。

そのまま何件かの店で聞き込みを続けたが、めぼしい情報を得るこ
とは出来なかった。時刻はもう夕方になろうとしている。パトカー
の窓辺から、傾き始めた陽の光が差し込んできた。

「…次で最後にしよっか」

「…ああ」

パトカーが停車する。最後の店は『海老名』。小さく質素な見た目
だが、こここの天ぷらは揚げ加減と味付けが絶妙だと、マニアの間では
知る人ぞ知る名店らしい。

引き戸を開け、店内に入る。奥のカウンターでは店主のおじさんが
仕込み作業をしており、店の中にはノスタルジックな雰囲気漂って
いた。

「ねえ…あれ」

「あん?」

店主は黙々と作業を続けていたが、その奥に写真立てがある事に気
がつく。写っているのは小学5年生くらいの女の子だった。

「すみません…えつと、その写真の女の子、可愛いですね。娘さんです

か?」

「ん? ああ…。俺に似ちやいないが、自慢の娘でね…」

「似てないんならテメーの子供じゃねーんじやねーの?」

無視する。

「えつと…娘さん、何かあったんですか?」

「……実はな、一週間ぐれえ前に『青涙病』とか言うのにかかっちゃまったんだ」

「青涙病……」

私たちと同じだ。娘さんは無事なのだろうか。

「……で? その娘はどうなったんだ。まさか死んだんじやあねえだろうな」

「いや、1日入院して何とか回復したよ。もつとも、病気の後遺症とかでここ数日の事は覚えてねえが…それでも、元気になって良かったよ」

店主のおじさんはここ数日で、かなり憔悴しているようだった。更に尋ねてみると、娘さんが入院したのは4日ほど前。一晩経った翌朝迎えに行くと回復していたらしく、2日前に退院したという。

「他に知ってる事はねえーだろうなあ? 隠してたら撃つ」

「なつ、何だお前さん!?! けっ警察呼ぶぞ!?!」

「警察は俺だ!!」

刑事は拳銃を構えながら警察手帳を開く。すかさず、私はスマホのカメラを起動し、一部始終を動画に収めた。

「なつ… テメエ、何撮ってやがる!?!」

「犬の手綱は、しっかり持っておかないとダメだから」

「誰が犬だ誰が!!」

ガルルル、と噛みついてきそうな勢いで刑事は私を睨む。だが私はそれを受け流すと、先程撮った動画を見せた。

「偉い人に知られたくなかったら、これ以上は控えて」

「俺を脅す気かよ……こちとら国家権力だぞっ」

動画を見せられ気後れしたらしく、刑事ブツブツ言いながら矛を収めた。

その後、私たちは海老名で少し早めの夕食を摂った後、店主にお礼を言い店を後にした。

「さて…そろそろ夕方だな」

「ゲームセンター、行こうか」

パトカーに乗り込み、シートベルトを締める。さつき高山くんからゲームセンターで合流との連絡が来たし、そろそろ向かって問題ないだろう。

「飛ばすぜ…掴まってな」

「え…？ちよつと待って、何するつも——」

私が言い終わる前に、パトカーはサイレンを鳴らしながら急発進した。

「いやいやいやおかしいでしょ！せめてサイレンはやめて！サイレンは！」

「ハツハツハー!!現場直行だオラア!!!」

けたたましいサイレン音を響かせながら、パトカーは夕方の繁華街を爆走するのだった……。

第4話：区立図書館

区立図書館は、この辺りで一番大きな図書館で、2階にはカフェやジムが併設されている。

「ふむふむ…なるほど。これが日本の図書館か」

目の前に佇む大きな建造物を見上げながら、私は呟いた。こんなに規模が大きい図書館ならば、何かしらの資料は入手できるだろう。そう思い、私は図書館の中へと入っていった。

中に入り、まずはインフォメーションカウンターに向かう。そこでは司書が数人受付業務をしていて、話しかけると気さくに答えてくれた。

「はい、何かお探しですか？」

「少しな。『青涙病』について、調べ物をしに来たのだが」

「ああ、青涙病ですね…でしたら、少しお待ちください」

司書はそう言うと言とコンピューターに向かい、資料を検索する。しばらくカウンター前の椅子に腰かけて待っていると、資料を手にしてこちらに向かってくる様子が見えた。

「この資料が該当しますかねー、今週の週刊誌とか医学誌…それと、この小説です」

彼女が差し出した週刊誌などの雑誌の中に、小説が混じっている事が意外だった。

そのタイトルは『魂の在る処』。随分と哲学的な題名である。

「小説、か…：…わかった、ありがとう。他に青涙病について、知っていることは？」

司書はしばしの間黙考すると、やがて躊躇うように口を開いた。

「実は…：…私の友人が、青涙病にかかってしまったんです」

「ご友人が…：。それは大変だったな」

「もう、3週間くらい前ですかね。無事に治ったので良かったのですが…：…」

そこまで言うと、彼女は再び口をつぐんでしまった。…これは、何かあるに違いない。

「ご友人に、何かあったのか？私で良ければ聞くぞ」

「……そ、それがですね。昔の友達と何か違う、っていうか。立ち振る舞いとか、記憶は私が知ってるあの子のままなんです。でも、病気になる前は柑橘系の果物が苦手だったんですよ。けれど、退院した後にはむしろ好物になって……なんでだろう」

「……ふむん。好みが変わったという事は？」

「それはないです。前は、匂いを嗅ぐ事すらも苦手だったので……ううん」

「分かった。貴重な情報だ。感謝する」

私が本を借りようとすると、彼女は思い出したように話しかけた。

「そうだ、借りた本は2階にあるカフェ『ブックレスト』にてゆっくりお読み頂けます。良ければお立ち寄りください！」

「……カフェ、か。」



「いらつしやいませー、カフェ『ブックレスト』へようこそ！ご注文が決まったらお呼びくださいね」

図書館の二階に併設されたカフェは借りた本が持ち込み可能な店だ。ドリンクや軽食を楽しみつつ本を堪能できるので、なかなか居心地が良い。私は席に座ると、メニューを開く。表紙には夏期限定のスイーツの写真が並び、ポップな字体と共に掲載されていた。

「……この『しろくまくりいむそおだふろーと』と言うのを一つ」

「かしこまりました、『しろくま・くりーむそーだ・フロート』おひとつですね！」

店員はそう言うのと厨房の方へと向かっていった。さて、待っている間にさつき借りた本を読んでおこう。

『魂の在る処』か……特に聞いたこともない小説だな。」

小説は、タイトル通り人間魂の所在について問う序文から始まっていた。魂は果たしてどこにあるのだろう。人間の心臓か。はたまた記憶——すなわち、脳なのか。文中には、同じ記憶を持った人物を複

製したとしたら、それは同じ人物なのだろうかという少々SFチックな事も書かれていた。

「記憶が魂、か……。」

そういえば、どこかの大学の研究機関が人間の記憶を元とした自律型の人工知能を開発しているという噂があり、一時研究者達の間で囁かれていたことがあった。あれは何と言っただろうか。確か、有名な音楽家の名前を冠したシステムだったはず――

「お待たせしました、『しろくま・くりーむそーだ・フロート』です」
本を読みながらぼんやり思考していたが、店員の声で我に返った。目の前には、如何にも美味しそうなアイスクリームがのったソーダフロートが。

スマホを取り出し、写真を撮ってみる。

「ほう……これは美味そうだな。後で高山達にも見せよう」

しばらくフロートを堪能した後、二冊目に移る。こちらは週刊誌だ。ここ何週間かで話題になっている『青涙病』について取り上げられている。手足の痺れや視界の霞みに加え、最大の特徴は病気が進行すると目から青い分泌液が漏れだす。そして、この症状が病名の由来にもなっているそう。

『今のところ、死者が出たとの報告はない』か……。徒那はこれがウソだと言うのだな」

あいつの話だと、この病の致死率は100%だという。なのに、患者の死をどうやって偽装しているのだろうか。

次は医学誌を読む。最近のものは青涙病についての見解が多いが、その中にふと、気になる見出しの記事があった。

『ヒトのクローン生成に成功、記憶の引き継ぎも問題無し。しかし倫理の観点から、多くの分野から批判が集まっている』……か。」

クローン。技術的には可能とされているが、この見出しが示す通り倫理や道徳の観点からこれまでは徹底した規制が敷かれてきた。しかし、この国ではいつの間にも認可が降りたのだろうか。私が来日する前の出来事なのだろうか……。

そこまで読んだ所で顔を上げると、向かいの席に座っている男性の

姿が目に残った。机いっぱいコピー用紙を広げ、時折何かを書き込んでいる。

しばらくその様子をじっと見つめていた私に気がついたのか、男性は顔をこちらに向けてきた。

「うおっほんー！」

私はわざとらしい咳払いで誤魔化した。男性は何とも言えない顔をしながら視線を再び机の紙に戻すが、何の作業をしているのだろうか。

このまま何も言わないのも気まずいので、思い切って話しかけてみる事にした。

「突然話しかけてすまない。何をしていたのか気になってな」

「え？ああ、すみません集中していたもので……。ちよつと夢中になりすぎました」

そう言つて、彼は机の上の紙をパラパラとめくつた。私は話を聞くべく、向かいの椅子に座る。

彼は『有働』という研究職の青年で、図書館での資料探しをしている時にこのカフェに立ち寄つたらしい。

「その紙は？」

「これですか？以前この図書館で見かけた本の写しです。ほら、今青涙病つてというのが流行つてるでしょ？青い涙を流すつていう……。それに似た現象について書かれていたから気になっていて。」

「青涙病に似た現象、か……。しかし、何故実物を借りていない？ひよつとして今は貸出中なのか？」

「いや、僕もその本を探しに来たんです。しかし、どうやら返却されておらず所在不明らしくて。迷惑な話ですよ」

青年に紙を見せて貰うと、『寶石を生む神様』というタイトルが書かれていた。もともと英語書籍であるらしく、それらが粗く翻訳されている。

紙には、だいたい以下のような事が書かれていた。

遠い昔に、青涙病と同じような症状が発生した島があったらしい。それと同時期に、海辺に「何か」が出現し、人々はそれを御神体と崇

めたそうなの。しかし、実は御神体だと思っていた「何か」こそが病気の元凶であり、島民が御神体を海に追い返すと島には平穏が訪れた……。

「ふむん……なるほどな。貴重な資料だ、ありがとう。」

「……そういえば、お名前を伺っていませんでした。名乗って頂いても……」

「…はっ、これは失礼をした。私はメア・ロワールと言う者だ。天文学者をしている」

「メア・ロワール……ああ、サイエンス誌に論文が載った!!」

「私を知っているのか？」

「僕も研究者の端くれですから。お会いできて嬉しいです」

「……まあ、私は有名だからな」

私がそう言うと、有働は握手を求めてきた。それに快く応じる。

「では、僕はこれで。何か聞きたい事があれば、また連絡して下さいね。」

「うむ、感謝する。有働」

カフェを去っていく有働を見送っていると、ケータイが鳴る。画面を見ると、取り急ぎ作ったLINEグループにメッセージが届いていた。

「高山か。何々……『ゲームセンターで合流！ユーマさんって人に会う』……。ユーマ？誰だそいつは」

きつと、あちらはあちらで何か情報を掴んだのだろう。

『宝石を生む神様』か……。

私はカギとなり得そうな本のタイトルを頭に刻み込み、フロートの残りを頂いて、図書館を後にした。

第5話：浜辺

「……よし、着いた。ここが浜辺だよ」

浜辺に到着した俺は、時計を確認する。時刻は15時になろうとしている所だった。これなら、暗くなるまでまだ時間があるので聞き込み調査はできるだろう。

「ん〜……いい所だね」

「あまり大きな浜辺じゃないから、この辺りは地元の人しかいないんだ。」

「……。」

「写真、撮ってきたら？調査は俺がしておくよ」

「えっ？いいの？」

「うん、少し休憩……って事で。写真を撮り終えたら、また声をかけて」

「オツケー……それじゃ、休んだ分は働きますよ、っと！少し休憩！」

晶さんはそう言うと、浜の方へと駆け出して行く。

俺は防波堤に腰かけ、凧いだ海の水面を、ただぼーっと眺めていた。

正直なところ、自分があと3日で死ぬという実感は湧かない。実感が湧かないから、恐怖心もあまり湧いてこない。でも、それが逆に不安だった。

「……また、海でも見に行こうかなあ」

もし、この後何事もなかったら、電車に乗って熱海辺りに出掛けようかな。貯金もあるし、誰か誘ってみてもいいかもしれない。バイト先で仲良くなった人……。店長とか、伊咲良先輩とか、白雪さんとか……一ノ瀬さんとか。

……一ノ瀬さん、大丈夫だろうか。バイト先でも人見知りか激しいし、あんな刑事さんと行動したら……

「その君ー、暇そうじゃん？」

「えっ？」

そんな事をぼんやりと考えていたら、いきなり声を掛けられたので俺は慌てて振り返る。話しかけてきたのは、この辺りの高校のジャー

ジを着た女子高生だった。

「あ……俺に何か用ですか？」

「いや、何してたのかなーって思ってる。」

「こ、これは俗に言う逆ナンと言うやつでは……？」

「いやいや、怯むな俺。丁度いい、聞き込みのチャンスだ。」

「あー、そうだ。いきなりですみません。『青涙病』っていう病気について何か知ってませんか？」

「青涙病？んー聞いたことある。最近ニュースでやってるやつっしょ？そういうや、奥平ん所の伯父さんが青涙病になったとかって言ったかなー……」

「奥平さんって？」

「あたしのクラスメイト。」

「なるほど……あ、もう一つ聞いてもいいですか？」

「いいよー。何？」

『カタリ』っていう人を知ってますか？」

「カタリ？あー、確かユーマがそんな名前言ったな。カタリってのは知らないけど、ユーマがいそうな場所なら心当たりあるよん」

ユーマ、だって？

俺はその名前に聞き覚えがあった。数時間前、一ノ瀬さんから「ユーマって人が何か知ってるみたい」とLINEが来ていたからだ。その情報は、晶さんと共有済みだ。

「本当ですか！その場所って……」

しかし俺の言葉を遮り、彼女はニヤリと笑った。不敵な笑みである。

「もし知りたいうって言うんなら……あたし達のバレーの練習、付き合ってよ！勝てたら教えてもいいよ〜」

「えっ、ええ!?!」

なん……だと……？

残念ながら俺は運動神経に自信はない。それに、見たところこの女子高生、バレー部だ。その道を嗜んでいる人には勝てる気がしない。「だいじょぶだいじょぶ、手加減してあげるしハンデもつけたげるか

らさく。ほらこつちこつち」

案内されるがままに浜辺に向かうと、バレーボールのコートが設営されていた。コートの中には女子高生がもう一人おり、さつきまでこの人と練習をしていたのだろう。

「うう…どうしよう…」

「あーいたいた…高山くんどこ行ってたのさ、写真撮り終えたよー」

「しっ、晶さん…」

俺は救世主を見るような目で晶さんを見る。助かった…かもしれない。

「あつれー、もう一人いたんだ。じゃあ人数合うね！キミもさ、あたし達のバレーの練習に付き合っつてよ」

「えっええ!?!僕ですか!?!」

突然矛先を向けられた晶さんは驚く。ここですかさずフオロー。

「晶さん、俺を助けると思って！もし勝てたら、『ユーマ』の居場所を教えてくださいるらしい」

「そ、そうなのか…。あまり運動は得意じゃないけど…やりませうかっ」

彼はそう言って、頭のバンダナを締め直した。

コートに立つ。向かいにはバレー部の女子高生が2人。サーブはあちらから。

ここまでできたら、俺も全力を出すしかない！

「よーっし、行つくよー!!」



「ぜえ、ぜえ…う、運動得意じゃないって嘘でしょ…」

勝負は付いた。結果は、何とか俺たちが勝利を収めた。しかし八割方晶さんのお陰である。途中、同点に持ち込まれた時は負けを覚悟したけれど。

「あんなに跳べるなんて……思わないじゃん」

「うーん、僕も全力だったよ。何とか勝って良かった…」

「やるね……ハンデ付けたとはいえ結構本気だったんだけどなー。でも、約束通り教えてあげる。ユーマは、夕方以降ならゲーセンにいるはずだよ」

「ゲームセンター、か…ありがとう!」

すぐに向かおう、と声を掛けようとする、晶さんは何やらカメラを構え、海の方向を向いていた。そのレンズの先には、10m程の高さの岬があった。

「晶さん、どうかした?」

「うん…今、あそこの岬をズームで撮影していたんだけど、根本に何かありそう」

「えっ?…ここからじゃよく見えないな…行ってみる?」

「そうしてみよう」

岬の根本に行ってみると、そこは洞窟のようになっており、空洞がぽっかりと口を開けていた。

スマートフォンライト機能を使って足元を照らし、進んでいくと5mぐらい歩いた所で行き止まりに突き当たった。

「……けっこう深い洞窟だね。ん?…今何か、光って…」

壁際に、何か光ったような気がしてそちらにライトを向けてみる。そこにあつたのは、岩場に似つかわしくない現代的な機械のようなものだった。

「なんだ、これ…キーパッド?」

「……だよな。これは…桁数は8桁みたいだ。なんでこんな所に?」

「分からない…けれど、写真は撮っておいた方が良さそう。お願いできてる?」

「任せといて」

謎のキーパッドの写真を撮り終えて、洞窟を出る。結局、あれ以外に何も目に付くものは存在しなかった。

一つ伸びをして、晶さんが言う。

「さつてと……じゃあ、ゲーセン行きますか?」

「うん、そうしよう。時間も丁度いいだろうし。…あ、その前に」

俺は携帯を取り出し、LINEでメッセージを送る。『ゲームセンターで合流！ユーマさんって人に会う』と入力し、グループに送信。

これで、何か手がかりが掴めるといいんだけど……

そう思いながら、俺たちは浜辺を後にした。

第6話：ゲームセンター

ゲームセンターに到着すると、入り口付近に銀髪の女の子が立っていた。メアさんだ。彼女はこちらに気がつくのと、すたすたと歩み寄ってきた。

「お疲れ様だ、二人とも。」

「メアさんも、お疲れ様。どうだった？」

「週刊誌に、青涙病についての記述があった。進行すると目から青い液が出るのが病名の由来らしい」

目から青い液、か。少なくとも俺たちの中で、その症状が現れた人はいない。これはまだ、病気がそれほど進行していないということなのだろうか。もしそうだとしたら、動けるうちに色々調べた方が良くかもしれない。

メアさんと情報共有を続けていると、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。晶さんとメアさんは、音のする方向に首を向ける。

「何だろう、事件ですかね？」

「……あのパトカー、こっちに向かって来ていないか？」

けたたましくサイレンを鳴らしながら道路を爆走していたパトカーは、ゲームセンターの駐車場に入るとそのまま入り口の横で急停車した。これは、ひよつとすると……

「……やっぱり、あれ刑事さんと一ノ瀬さんだよ！」

「は!?!いや、でも何でサイレン……」

「今は合流する方が先だろう。向こうの話も聞きたい」

3人でパトカーに駆け寄る。まず降りてきたのは、随分と憔悴した様子の一ノ瀬さんだった。俺は堪らず駆け寄る。

「う、うう……高山くん……」

「一ノ瀬さん!どうしたの!?!」

「この刑事、頭おかしいよ……」

続いて、刑事さんが運転席から降りてくる。その顔はどこかスカツとして見えるように見えた。

「おーしここか?ゲーセン。不良シバきに行くか!!」

「け、刑事さん……随分と荒い運転でしたけど大丈夫なんですか…?」
「あん?ちゃんと速度制限守ってるから問題ねえよ。」

「一ノ瀬さんがグロッキーなんですけど」
「うるせーなー、これでも飲ましとけ!」

そう言つて刑事さんが投げつけてきたのは市販の酔い止め薬だった。
…いや、酔つた後に渡されましても。

刑事さんは俺の抗議もどこ吹く風、ずかずかとゲームセンターの中
に入つていった。

メアさんが心配して一ノ瀬さんの顔を覗きこむ。

「夏凜、大丈夫か?」

「うん…馬鹿な大人の扱いはお兄ちゃんに慣れてるから、何とか」

一ノ瀬さんは立ち上がり、裾を払う。俺たちも刑事さんに続き、
ゲームセンターに入った。

さて、ここから『ユーマ』という人物を探さなければならぬが、俺
たちが持っている手掛かりは名前だけで、どんな服装だとか、どんな
見た目だとかは分からない。誰かに尋ねてみるべきだろうか…

その時、ゲーム筐体の前でわいわい盛り上がっている男子高校生グ
ループが目に入った。とりあえず、あの人たちに聞いてみよう。

「ちよつとすみません。聞きたいことがあつて…」

「ん、何?」

グループのうちの一人が答える。特に怪しまれてはいないようだ。
「えっと、人を探してて。『ユーマ』って名前なんだけど、このゲーム
センターにいるって聞いたんだ。知つてたらどこにいるのか教えて
くれない?」

「ユーマ?あーあいつね。いつもこの時間には居るんだけど、今日は
いないみたいだな…:…なんか仕事が忙しいんだって。また明日来
てみたかどうか?」

どうやら、本日はすれ違つてしまったらしい。彼の言う通り、まだ
明日来てみるべきだろう。

俺は振り返り皆と顔を見合わせると、今度は晶さんが口を開いた。

「じゃあ、『青涙病』っていう病気について、何か知らないかな?」

「あ…オレ知ってますよ。…伯父さんが、青涙病にかかつてグループの後ろの方にいた子が、おずおずと口を開いた。という事は、彼が奥平くんか。」

「この間、伯父さんが退院したからお見舞いに行っただんです。その時に声掛けたら、オレの顔じつと覗きこんで」

『5歳の時、一緒に釣りに行った』

『8歳の時、風邪の看病をした』

『11歳の時、自転車で転んで怪我したのを背負っていった』

「……みたいな感じで、うわごとみたいに言ってたんすよ。それ以降はいつもの伯父さんに戻ったんですけど、あれ何だったんだろいうなあ…。」

その後も知ってることを聞いてみたが、これが一番有力そうな情報だったので、ほどほどに切り上げた。



俺たちは一度ゲームセンターの脇に集まり、情報を共有し合う。

「んだよ不良いねえじゃねーか…ったく」

「……そうだ、俺たち、海辺の洞窟で何かの機械みたいな物を見つけたんです。晶さん、写真出せます?」

「ん、いいよ。少し待ってね…はい、これ」

デジタルカメラの画面には、岩場の影にひっそりと隠れたキーパッドのような物が見てとれた。

「何だこれは。天然の洞窟にしては場違いだな」

「……金庫の扉、みたい」

「この洞窟が何なのか…分かりそうな人、知らない?」

「……そういえば。今日の昼間、徒那の研究所所属だって人に会った」

「あーあのアホそうな女だろ?ダメ元だが、そいつに聞いてみつか」

刑事さんは携帯を取り出すと、誰かに電話をかけ始めた。

30秒。1分。どうやら相手が電話に出ないらしい。刑事さんは貧乏ゆすりをしながら苛立ちを隠そうともしない。

長い、長い、永すぎたコール音の後、ようやく相手は電話に応答したみたいだった。

「もぐもぐ……ごくんつ、ふあいこちら桃木——」

「おっせえーんだよタコ!! 一体何分待ったと思ってたんだゴルア!!」

「あーすみません〜今ごはん食べてました! それで、何か用ですか〜?」

電話に出たのは若い声の女性だった。食事中だったららしく、電話口の向こうから人の話し声や食器を洗う音が微かに聞こえてきた。

刑事さんの横から、晶さんが口を挟む。

「すみません、少し伺いたい事があります」

「ほえ、どちら様ですか? ……んーまあいいですけど。何か?」

「今日、海辺に行っただんです。そこにある洞窟の中で扉…? を開けるためのキーパッドみたいな物を見つけたんです。その場所について何かご存知ですか?」

「うーん、企業秘密です! ……んっ!? この麻婆豆腐美味っ!」

実に美味しそうに食事を堪能していらっしやる。そういうえば、昼間から何も口にしていない……。

腹の虫が鳴きそうになると、刑事さんが耐えかねて口を開いた。

「あ〜……! ……おいテメエ、企業秘密聞かれんのと今日の下着の色聞かれんのどつちか選べ」

「ん〜今日の下着の色はですね〜……」

「わーわーわー!!! すみませんお電話代わりました高山ですっ!!」

危なかった。危うく刑事さんの失言で訴訟になってもおかしくない状況になる所だった……。後ろでは刑事さんと晶さんが言い争っている。ごめん晶さん。そのまま刑事さんをお願い。

「いっぱい人がいるねえ〜、善き哉善き哉。」

「すみません…改めまして、高山と申します。あと一つだけ、お伺いしたい事があります」

「ほいほい、何ですか？」

「さつき研究者の方って仰ってましたけど、青涙病のワクチンって……どうなってます？」

「ワクチンですか。我々も研究は進めているんですがねえ、決定的な素材が足りないみたいで……前に図書館で見た『宝石を生む神様』って本に似たような例が載ってたんですけどお……」

『『宝石を生む神様』……？』

メアさんがぼそりと呟く。何か知っていそうな素振りだ。

『『宝石を生む神様』ですか……。どんな内容ですか？』

「内容、ですか……んく忘れちゃった！たぶん図書館にあると思います。あ、そろそろお勘定するので失礼しますよ」

そこで電話は切れた。これは一歩、前進したのでは？

「じゃあ、手掛かりはこの本になりそうだね。メアさん、図書館にその本はあった？」

「……残念ながら、返却されていなくて所在不明だそうだ。」

「そっか……」

情報収集と言っても、一筋縄では行かないようだ。俺が再び頭を捻っている、メアさんは思い出したように、図書館での出来事を話し出した。

「……そういえば、図書館で司書と話したのだが、その人のご友人が青涙病に感染したと聞いてな。現在は回復したらしいが、発病した前と後で嗜好が変化したそうだ」

「私も、商店街の店で青涙病に感染した人の事を聞いたよ。娘さんがかかっちゃったらしいんだけど、店主さんが言うには記憶がないだって……。これ、何かおかしいよね」

確かに、徒那の言う通りならば、青涙病に感染した人は全員死亡しているはず。しかし、なぜ「感染した」とされる人が生きているのか。何かカラクリがあるはずだ……。

「それと、図書館で入手した情報はもう一つ。日本政府が、ヒトのクローン生成実験に成功したらしい」

「あ？クローンだア？」

「それ、本当ですか？」

先ほどまで言い争っていた晶さんと刑事さんはようやく話に決着が着いたらしく、クローンという言葉に反応してきた。メアさんの話だと医療誌に載っていたものだというから、この情報は事実とみていいだろう。

「何にせよ、クローンと患者の死の偽装。この二つは密接に繋がっていると、私は考えている。」

「人のクローンと、死んだはずの人が生きてる……。」

皆、そこで押し黙ってしまった。本日はこれ以上の捜査を続けても思った成果は得られないだろう。

「……じゃあ、今日はここまでにする？」

「うん。とりあえず、ユーマって人に会うまでは進展はなさそうだね……私そろそろ帰る、今日シフト入ってるし」

「えっシフト!?……ヤバイ、俺どうだったっけ……!」

しまった。調査の事だけで頭がいっぱいで、肝心のバイトのことをすっかり忘れていた。今日、シフト入ってたらどうしよう……。

一ノ瀬さんは店長に電話をして確認をしてくれるようだった。

「……もしもし、一ノ瀬です。」

「お、夏凜ちゃんじゃん！健康調査、どうだった？」

「あ……それが、身体に少し不調が見つかってしまったみたいで。高山くんも一緒に居合わせたんですが、彼も不調です」

「まつー！高山ちゃんも一緒にいるのね？もう……二人とも、体調は崩しちゃダメよ。お大事にして頂戴ねえ〜」

今、電話口から聞こえてきたオネエ言葉の人は、バイト先の先輩である伊咲良 柊真さんのものだ。変わり者だが、高校生である俺たちにも親身になってくれる良い人だ。

「えっ！高山くんも夏凜ちゃんも健康調査大丈夫なの!?早く戻ってきて欲しいけど、私たちに任せてくださいよーっ」

この人は同僚の白雪 苹果さん。俺と一ノ瀬さんよりは一つ年上だが、いわゆるほんわか系で同世代のように関わりやすい人だ。

「……と、いう事らしいよ。だからきっちり静養すること。元気に

なったら、また頑張ってもらおうからね」

「て、店長…、皆…！ありがとうございます！」

「……ありがとうございます、店長。」

店長——水峰^{すいほう} 藍^{らん}さんの言葉を聞き、俺たちは思わずお礼を口にしていた。これは何としても完治させねば。

「…というわけで、しばらくバイトはお休みになりました。明日からもよろしく願います、皆さん」

俺は改めて皆に向き直り、頭を下げた。

これからどうなるのだろう。残りあと2日のうちに、この病を治療する手段を見つけることが出来るのだろうか。

いや、考えても仕方ない。まずは、家に帰って静養しよう。話はそれからだ。

俺たちは一言二言会話を交わしたのち、今日のところはその場で解散となったのだった。

第7話：接触

翌日。

俺は再び街へと繰り出し、待ち合わせの場所へと向かっていた。歩きながら、首に着けられているチョーカーを触る。

朝起きた時、特に体に不調はなかったがこのチョーカーはまだ巻き付いたままだ。早く徒那からパスコードを聞き出して、これを外して貰わないと。俺たちの命は、未だに奴の掌の上なのだ。

待ち合わせ場所に指定した駅前広場に向かうと、既に晶さんと一ノ瀬さんが待っていた。

「…お、高山くん。おーいこつちこつち」

「…おはよう、高山くん」

「二人ともおはよう。あの後何ともなかった？」

「僕は大丈夫だったかな」

「私は特に何も。チョーカーの数字はどうなってる？」

そこで、各々チョーカーの数字を確認し合う。結果は3人ともにステージ1のままだった。特に俺と晶さんは、昨日海辺でバレーに付き合わされたので悪化するかもと恐れていたが、その心配は杞憂に終わったようだ。

「他の皆は？」

「まだ来てないけど、連絡はあった。阿曇さんからはさっき『すぐ向かうから場所教えろや』って言われたよ」

晶さんは呆れたように肩をすくめた。

残りの二人を待っていると、程なくして横断歩道の向こうに銀髪の少女の姿が見えた。メアさんだ。しかし、その足取りはおぼつかないように見える。

彼女はしばらく辺りを見回した後、こちらに気がつくどゆっくり歩み寄ってきた。

「おはよう、皆」

そう言う顔色は、昨日とは違って仄かに青白い。

「メアさん、大丈夫ですか？まさか…」

「……そうだ。昨晚、急に具合が悪くなつてな。まさかと思い、同居人にチャョーカーを確認して貰つたら……」

そこで、一ノ瀬さんが彼女の後ろに回り込みチャョーカーを確認した。

「stage:2」……だつて」

「どうやら、私の病が一段階進行してしまつたようだ……だがさしたる問題はない。たまに頭痛がするのと、左足が少し動き辛いくらいだ」

「メアさん……今日は、あまり無理しないでね」

「承知した。ところで、あの刑事はまだ来ていないのか」

「みたいです。さつき僕の所に連絡が来たので、場所だけは教えておきましたけれど」

噂をすればなんとやら。もう聞き慣れたエンジンの駆動音が響き、遠くからパトカーが走つてきた。パトカーをロータリー前に停車させ、中から刑事さんが降りてくる。しかしドアを閉める直前、彼は一瞬体勢を崩しかけた。

「……チツ。よおガキ共、今日こそシバきに行くか」

「刑事さん、今少しよろけたよね」

「あん？何でもねーよ」

「……チャョーカー、見せて」

「じゃ、後ろ回れ」

一ノ瀬さんが彼のチャョーカーを確認する。予想通り、彼の病状も一段階上のステージ2に上がってしまったようだった。そんな刑事さんを、メアさんが心配そうに見つめる。

「お前もか、阿曇」

「ステージ2が何だつてんだ、2とかピースだぞ、平和平和」

「症状は何が出ている？」

「頭が痛え。あと、左足が思うように動かねえがまあブレーキが踏めないだけだ、だいじょぶだいじょぶ」

「では、あまり運転しない方が良くと思うぞ」

「知らねー！歩けねえ分パトカーが足になるんだよつ、ブレーキなんて右足でも踏めらあ。頭痛はEveクイック飲んだら治つた」

刑事さんはあつけらかんと言い放つと、近くのベンチに腰掛けた。俺は改めて皆を見回して、今日するべき事を確認する。

「…じゃあ、今日は夕方になったらゲームセンターへ行くよ。昨日会えなかったユーマさんに会って、何としても話をしよう」

俺が確認作業を続けていると、ふと一ノ瀬さんが笑みを浮かべていることに気がついた。彼女の笑っている顔は、あまり見たことがない。

「どうかした？一ノ瀬さん」

「…なんか、こうして学校行かずに昼間に街中を動くのって、背徳感あるね」

「…ちよつと楽しんでる？」

「いや。別に……」

彼女はそっぽを向いてしまった。……ううん、なかなか距離感がまだ掴めないなあ……

「とりあえず、夕方までどうします？」

「じゃあ、もうすぐ正午ですし…少し早めのお昼にしますか。皆さんどこか行きたい所は？」

「サブウェイ!!」

「私は……マックとか」

「ふむ、日本のファーストフードは美味しいと聞いた。その店は世界的だがたまには悪くないだろう」

「あー、僕も久しぶりにポテト食べたい気分です」

「俺だけアウェイかよ!!……っーか、どこにあんの。遠いならパトカー乗ってけ、送ってってやる」

『それはいいです』

4人同時、満場一致の拒否だった。

「何だよ、乗りたくねーのかよ……手錠なしでパトカー乗れるチャンスなんて滅多にねーぞ」

「何で手錠付けないきやいけないんですか」

「いいか高山？手錠ってえーのはパトカー乗るための切符だと思え」

よく分からない理屈をこねられた。



昼食を済ませ、本日も街中で聞き込みをしていると時刻はあつという間に夕方になった。聞き出せた情報は昨日と変わらなく、ほぼ進展なしという状態だったので『ユーマ』に会うべくゲームセンターへと向かう。

自動ドアから中に入ると昨日も楽しそうに騒いでいたグループを見つめる。再び「ユーマはどこか」と尋ねてみると、「外の喫煙所だぜ！」と、入口の方向を指でさされた。

「んだよ喫煙所か。とりあえず一服させろ」

「タバコか…。刑事さん、俺も行きます」

「ガキは喫煙所入るんじゃないねー」

「父が吸ってますから慣れてます。皆はここで待つてて」

「僕も行きますよ。どんな人なのか興味があるし」

喫煙所の扉を開けると、中では金髪で黒いコートを羽織った、如何にも不良という感じの青年がタバコをふかしていた。

「テメエがユーマか？」

「あ？そーだけど…何だアンタら、大勢で」

「いきなりすみません。俺たち、あなたに聞きたいことがあって…。昨日から探してました」

俺が事情を説明すると、ユーマさんは少し顔を下にやった。その視線の先には、首元に着けられているチョーカーが。

「…：はっはーん、なるほどねエ。アンタら面白そうな事に巻き込まれてんじゃない、同情するぜ。…で？何か用？」

「俺たちは今『カタリ』という人を探していて…あなたに尋ねれば、どこに居るのか分かると聞きました」

「カタリ、ねえ…。教えてやってもいいぜ。俺とゲーム勝負して勝てたらな」

「またこの形式か……」

俺は思わずため息をつく。だが、後ろの二人はやる気らしい。

「ゲームはこのゲーセンにある奴だったらどれでもいい。アンタらが好きなの選びな」

「音ゲーとかは得意ですよ。ビートセイバーとかあるかな……」

「やってやろうじゃねえかよこの野郎、マリカやるぞ！おら勝負だユーマ!!」

刑事さんはそう言いながら喫煙所を出ていった。俺たちもそれに続く。

「あれがユーマか…夏なのに暑くないのだろうか」

「高山くん、どうだった？」

「…何か、ゲームで対決することになったって。勝ったら教えてくれるらしいよ」

俺たちも再びゲームセンターの中へ。宣言どおり、刑事さんはユーマさんとレースゲームで対戦しており、デッドヒートの最中だった。

「はっはアー！大人舐めんなー!!」

「大人げない……」

横にいる一ノ瀬さんが呟く。勝負は割と白熱していたが、ギリギリのところまで刑事さんのキャラクターが滑り込みでゴール、軍配は刑事さんに上がることとなった。

「っしやあオラア!!手加減してやった方だぜ」

「ハッ…やるなアンタ。いいぜ。約束通り、カタリの見つけ方を教えてやるよ。奴の居場所が知りたいんだろ？なら、ネットで『黒い蓮の葉』って検索して、『黒』って名前のページに入ってみな」

「黒い蓮の葉か。こいつぁ手柄になるな、ぐへへへ……おいユーマ！お前歳いくつだ？」

「教えるわけねえーだろ」

「高山くん、スマホ貸して」

「え？いいけど……」

一ノ瀬さんは俺の携帯を使い、ユーマの言った通りにキーワードを入力してゆく。

一番上にヒットしたものを開くと、真つ黒なページが出現した。これは、いわゆるダークウェブというものでは…？一ノ瀬さんが俺の携帯を使った理由が分かった気がする……。

「黒いね」

「下までスクロールしてみな」

一番下までページを繰ると、小さな白い文字で「今日の酒盛り↓レッド・アイ」と書いてあった。

「それが店の名前だ。奴は足がつかないように、各地の酒場を転々としてんのさ」

「この店に、カタリが……ありがとう、ユーマさん」

「約束だしな。もういいか？」

俺は改めて頭を下げる。ユーマさんは振り替えて「ま、ほどほどに頑張れよ」とだけ言うのと去っていった。

「よし、これで手掛かりは掴めたね。そのバー、どこにあるんだろう」

「待ってて晶さん、今検索する」

店の名前を検索すると、このゲームセンターからほど近い繁華街の一角にある、ビリヤードバーだった。

「バー、か……私たち未成年じゃ行けないね」

「俺あ三十路だ、行けるぜ。突入だ」

「僕も一応成人はしてるんで大丈夫ですよ。となると刑事さんと二人か……問題起こさないでくださいね」

「お前こそ足引っ張んじゃねえぞ」

二人は睨みあう。刑事さんが暴走しても、晶さんなら何とか止めてくれる……だろう。

「……なんだか時間掛かりそう。私飲み物でも買って来ようかな」

一ノ瀬さんはそう言うのと表へ出ていった。カタリは一体、どんな情報を持っているのだろうか……。

こうして、今夜はバーに潜入することとなった。

第8話：BAR

バー「レッド・アイ」は、ゲームセンターからほど近い、繁華街の路地を入ったところにあった。隠れ家的な雰囲気売りの店らしく、店の周りに人影は見えない。

打ち合わせ通り、店の中には刑事さんと晶さんが入ることになっている。残った3人は外で待機。中の状況が把握できるように、晶さんに俺の携帯電話をカメラをオンにしたまま、通話状態で持つていつてもらうつもりだ。

「よーっし飲むか飲むか」

「酒は目的じゃないですからね」

「わーってるよ。んじゃ行つて来るわ」

二人が店に入ろうとした瞬間、路地裏に着信音が響き渡る。慌てて端末取り出した端末は、徒那から至急された連絡用のものだった。

俺は通話状態をスピーカーにし、応答する。

「……もしもし」

「やあ諸君、進捗はどうかかな？」

電話に出たのは徒那だった。こちらがそろそろカタリと接触すると踏んで、連絡を寄越してきたのだろうか。

「…今から、カタリに会うところですよ」

「おお、それはそれは。邪魔して済まなかった。奴と接触するのなら、この端末を通話状態にしてやり取りの一部始終を流しておけ。いな？」

それは今、俺の携帯でやろうとしていた事だ。この端末でも行えというのか。

「……今、やろうとしています。他に何か？」

「ならば良い、引き続き調査を続行するように。」

徒那はそう言い残し、電話は途切れた。

しかし間髪入れず、再び着信音が鳴る。また徒那からだろうか。電話番号を確認する前に、刑事さんに端末を取り上げられた。

「あつ…」

「つたくうるせーな……。はいこちら警視総監！要件あんなら小分けにすんじゃねー!!まとめて言——」

「いきなりで済まないが、よく聞いてくれ。電波が戻った後、彼は『システムトラブルで一時的に電波が入らなかつた。聞いた事を包み隠さず報告しろ』と言うだろうが、あまり彼を疑うような言動はするな」

電話口から聞こえてきたのは、聞き覚えのない女性の声だった。電話の主はそれだけ言うと、一方的に通話を切断したらしかった。

「は？何だ今の。気持ちわりー」

刑事さんは端末を俺に投げ返してくる。一応、俺は言われた通りに徒那の端末を通話状態にし、俺の携帯と一緒に晶さんに預けた。

「じゃあ、二人とも。よろしくね」

「任せてといて、刑事さんが暴走しないようにしっかり見張っておくから」

「暴走なんてしねーよ！おら早く行くぞ」

刑事さんと晶さんはバーの中へ。俺の携帯に繋げてある一ノ瀬さんの携帯から、中の様子を伺う。

「ふむ、見たところ普通の洒落たバーだな」

「ビリヤード台がある。初めて見たかも」

「……どう？晶さん、怪しい人物はいる？」

「……見た限り、それっぽい人はいないかな」

「マスター！いつもの」

居酒屋みたいなセリフを言う刑事さんの横に、晶さんが腰かける。カメラを通して、綺麗に拭かれた机が天井の照明を反射しているのが見えた。

「珪水、俺は今、活路を見いだすための二択で悩んでる」

「と、言うത്？」

「二つ目。拳銃を天井にぶっ放してから『警察だ!!』って言う。二つ目。『警察だ!!』って言うってから拳銃を天井にぶっ放す」

「三つ目！拳銃を使わずに穩便に済ませる!!」

「んだよ、腰抜け」

「そうですね、僕あなたと違って弱虫ですから……」

このままでは埒が明かない。マスターにそれとなく尋ねてみるのはどうだろうか。それを提案すると、晶さんがうまい具合に聞き出すことに成功した。刑事さんは間髪入れずビリヤード台の前にいた一人の男に歩み寄り、警察手帳を見せる。

「カタリ、だな？」

「カタ……え？」

「おいマスター！話がちげえぞ!!」

人違いだったようだ。刑事さんは拳銃を取り出さんばかりの勢いでマスターを睨む。

「何なんだよ……つたく」

「君、ここは初めてかい？折角だから一つ打ってかないか」

「あ？打つって何をだよ。パチンコ？」

「違う違う、ビリヤードだよ」

「やだ」

「君も男なら、ビリヤードぐらいできるだろう」

「殺ってやろうじゃねえかよこの野郎！勝負!!」

状況を見守っていると、別の男が刑事さんに話しかけて来ていた。どうやらビリヤード勝負を持ちかけているらしい。

「ふあ……思ったよりヒマだね」

「そうだな。しかし、見たところうまくやっているようだが」

「うまくやってるのかな……あ、飲み物買うの忘れてた。買ってこよ……」

「あ、俺が行くよ。ちょうど何か飲みたかったし」

「なんだか高山くん、パシリみたい」

「別にパシられてるつもりはないんだけどなあ」

「…私、Qooのりんごね」

「クー？」

「メアさん、Qoo知らないのか……ジュースだよ」

「なるほど……私は水でいい。丁度薬を飲もうと思っていたのだ」

二人の要望を聞き、俺は近くの自販機まで行くことにした。端末は

二人に預けてあるので、後で何かあったかを聞くことにしよう……。



「な、何とか勝てた……。」

最近、こんな役回りが多い気がする。

僕たちはバーに潜入し、カタリから話を聞き出そうとしていた。その過程で刑事さんがビリヤード勝負を挑まれるも、敗北。勝てたらカタリについて教えてくれるというので、仕方なく僕も挑戦したのだ。

「ほほう、驚いたな。君はなかなかやるようだね。見くびっていたよ」

「…お褒めいただき、ありがとうございます」

「それじゃ、個室でも要件を聞こうか。」

「え、それって……」

「ご名答。俺が『カタリ』だよ。」

通された個室は、黒で統一されたシンプルな部屋。男——カタリが扉を閉めると、ホールの声はほとんど聞こえなくなった。

「まさかテメエがカタリとはな。逮捕していいか？」

「勘弁勘弁。知っている情報を教えるから見逃しておくれ」

「は？見逃すわけ……」

「刑事さん、ここは抑えて。…それでカタリさん、青涙病については御存知ですよね？」

「……ああ。知ってるとも」

「では、その事について……」

「待ってください、俺たちも会話に参加しても？」

胸ポケットに入れていたスマホから、高山君の声がする。話に参加したいというので、イヤホンを外しスピーカーモードにしておいた。

「君は？」

「高山直人と申します」

「なるほど、外にもいるのか。君たちは、頼りになる仲間を持っている

ね……いいよ、話をしよう。」

高山君と一緒に、僕たちがこれまで搜索してきた経緯を話すと、彼は青涙病と徒那について心当たりがあると言い、説明してくれた。

「3ヶ月ぐらい前だったかな。俺はとある筋から『輝く青い毛束』を手に入れたんだ。」

「青い毛玉だあ？」

「毛束だよ。綺麗だったものだから高値で売れると思ってね、当たり障りのないオークションサイトに出品したのさ。その時に落札した人物の名前が、徒那だった」

「……ここで繋がるのか……」

「その後、青い毛束はどうなったんですか？」

「……さあね。俺は出品しただけだから、落札された後の事は知らない。気になるのなら、徒那に直接聞いてみるといい」

「メモっとくか。続ける」

カタリは刑事さんに促され、一つ嘆息してから話を続けた。

「実はだな。俺が接触した『ある筋』っていうのは建造物の解体を請け負う会社だったんだ。それまでは新進気鋭の優良企業だったのになあ……」

「その業者のことは、伏せなくてもいいんですか？」

「大丈夫だ。だって、もうないしね。汐留工業所っていうんだけど」

「なぜ無くなったんですか？」

「……死んだからだよ。社長も社員も、一人残らずな」

絶句した。中小とはいえ一企業だ。そんなに大量の人が、死んだなんて……

「それも、ただの死に方じゃない。もれなく全員、今流行りの青涙病と同じ症状で死んだんだ」

「青涙病と、同じ……」

「あの工場に何があったのかは、跡地を調べてみれば分かるさ。……俺が話せるのはここまでかな」

「……情報提供、ありがとうございました」

「……ありがとうございました」

「ハッ、いいっていいって。君達も気を付けることだね。俺は、もうこんな気味が悪い事件に関わるのはまっぴらご免だよ……」
彼はそう呟くと、グラス一杯のウイスキーを煽った……



カタリの話聞いて戻ってきた二人と、俺たちは合流した。
情報を整理していると、再び携帯の着信音が鳴る。徒那からだろう。

着信を取ると、やはり徒那からのものだった。

「システムトラブルで一時的に電波が入らなかったようだ、聞いたことを包み隠さず話せ」

バーに入る前、謎の女性が言ったことと同じことを徒那は口走った。俺はカタリから聞いたことを、隠さずに徒那に報告した。

「…ふむ、そうか。ご苦労だった。では引き続き調査を——」

「待ってください。一つ、お伺いしたいことがあります」

「何だね？」

「輝く青い毛束。あれが、青涙病に関わっていることは間違いないはずです。それを落札したのは——貴方ですか」

もしその毛玉が徒那の手によって落札され、利用されたのだとしたら。そんな事を考えてしまい、俺はつい余計な一言を口走ってしまった。

「……何を馬鹿な。私は知らない、同姓の別人だろう。たかがオークションサイトのアカウント名だ」

徒那の声が、不機嫌に染まっているのが分かる。しかし、追及せずにはいられなかった。ひよっとすると、多くの人がいいつのせいで

……

「それでも、もしあなたが——」

「おいおい高山よお、こいつは疑われたらびえんしちゃう赤ちゃんなんだぜ？もちよつと優しく扱ってやんな」

「あ……」

気が付くと、通話は既に切られていた。ツー、ツー、という不通音が、耳元で木霊する。

「ごめん……皆。ちよつと感情的になって、出しやばりすぎた。ごめん」

何を正義漢ぶってるんだ、俺。身の振り方つてもんがあるだろ……やはり、一介の高校生ごときがどうにかできる案件じゃないのかもしれない……

「いや、よく言ったよ。僕もムカツとしてたんだ」

「……正直、私も今一番怪しいと睨んでいるのは徒那だ。あの反応、何か隠しているな……フツ、分かり易い奴だ」

「いいんじゃない、そのぐらいが。高山くんつてそういうところあるし」
刑事さんは、病院がある方角に向かってあつかんべーをしていた。

「はは……何さ、そういうところつて」

「高山くんつて、生命力強そうだよね。ゴキブリみたいな」

「え、ええ……褒められてるのかな、それ」

「あー分かるわ、頭撃つても死なねえタイプのゾンビ的な」

「あはは……ありがとう、皆」

俺が頭を下げようとしたところで、再び着信音が鳴り響いた。今度は番号を確認する。やはり、徒那とは違う番号だ。俺は端末を刑事さんに渡す。

「はいこちら阿曇警察署!!!」

「先ほどは失礼した。君達が『高山直人』『珪水晶』『阿曇爽雨』『一ノ瀬夏凜』『メア・ロワール』で間違いないな？」

「お前誰だよ!!!」

「自己紹介が遅れてしまい、申し訳ない。私は外海^{そとみ}。日本政府の者だ」

『日本政府う!?!』

全員で声を揃えて驚く。

まさかの日本政府。これはいよいよ、一介の高校生たちが担う案件ではなくなってきた……ような気がした。

第9話：汐留工業所

「私は外海。日本政府の者だ」

『日本政府う!?!』

全員で声を揃えて驚く。まさかの政府関係者からの着信に、俺たちは面食らっていた。

「……あ、えつとお疲れ様です。へいへい、今日は何の要件で?」

途端に物腰が低くなる刑事さん。中間職つていうのも大変なんだな……

「君達は、徒那に仕向けられて青涙病の調査をしているのだろうか? 私も同じだが……徒那はどうも怪しい気がする。君達が良ければ構わない。徒那には内密で、協力させてもらえないだろうか?」

「も、もちもちのろんろんに決まってるじゃないっすか、だよな高山!?!」

「ほ、本当ですか!?!喜んで!」

ここに來て政府が味方に付いてくれるなんて、渡りに船だ。俺たちは快諾した。

「では、君達が入手した情報を共有してくれ。あまり長時間接触していると向こうに判明する恐れがあるので、情報は2, 3点でまとめてもらえると助かる」

これまで出た情報の中で重要そうなものは、青い毛束を仕入れたのが徒那だったこと。それと、『寶石を生む神様』という本が鍵になりそうだということ。この際だ、人間のクローン技術についても尋ねてみよう。

「…なるほど、やはり徒那の行動には不審な点があるな。君達への態度といい、協力的であるとは思えない」

「二つ聞きたいことがあります。青涙病にかかった患者の中で死亡者は出ていないそうですが、実際の致死率は100%だと聞きました。…もしかして、クローン技術と何か関係が?」

「……。ここまで関わってしまった以上、君達に隠す理由もないだろう。実は私はクローン技術が専門でな、その事についてはよく知って

いる。政府は、青涙病で死亡した患者のクローンを生成し、本人と入れ換えているのだ」

「なるほど、繋がったぞ。それで記憶や嗜好、会話に齟齬が出ていたわけか」

メアさんが納得したといった感じで頷く。

「非人道的と思われるかもしれないが、なにせ有効な治療法が今のところ存在しない病気だ。この件に関しては他言無用でお願いしたい」
「分かりました。…それで、俺たちはこれから汐留工業所という所に向かおうと思っています。」

「汐留工業所……何か当てがあるのか？」

「徒那が、そこから裏のバイヤーを通じて青い毛束を入手したみたいなんです」

「……了解した、情報提供感謝する。他に質問は？」

「政府のお方！徒那の野郎を何発までなら撃つてもいいでしょうか！」

刑事さんが嬉々として名乗りを上げた。質問の内容としてはズレてる気がするけど……

「なるべく表沙汰にしない方向で頼む。ではそろそろ切るぞ」

「ありがとうございます、外海さん。」

「最後に一つ。下手に情報を隠しすぎて、奴に不信感を与えるのは危険だ。くれぐれも注意してくれ」

電話が切られ、不通音が鳴り響く。俺は端末をポケットにしまうと、皆の方を向いた。

「……という訳で、もう夜だけどこれから汐留工業所に向かおうと思う。皆、大丈夫？」

「私は問題ない。このまま工業所に向かおう」

「大丈夫だよ、僕もまだ動けそうだから。」

「ここまで来たら乗り掛かった船だしね。早く済ませよう」

「なら……俺の出番だな」

刑事さんはそう言ってパトカーを指した。行動資金にも限界が見えてきたし、この際タクシーなどは使ってられないだろう。

「……癩だけど、仕方ないか」

「刑事さん、安全運転で頼みますよ」

「よおーしガキ共、乗れ乗れ！あ、手錠いるか？」

『いりません』

またしても満場一致の否定。俺は助手席に乗り、後部座席にメアさん、晶さん、一ノ瀬さんが乗った。

「おっしやあ飛ばすぜシエリー！」

「誰ですか……」

「この愛車オシナの名前だ。俺は——風になるツ」



「…あ、ヤツベちよつとカスった。シエリーツ!!」

ガリツという音の後、超絶急ブレーキでパトカーは停車した。俺たちはぞろぞろと車から降りる。

「何なのあの運転……バカなの、死ぬの……?」

「ドラえもんの酔い止めあるぞ」

「いらない」

「うう、病み体にこれは少し辛いな」

「落ち着くまで肩貸しますよ……」

汐留工業所は、海岸に近い場所にある事務所で、今は人の気配がない。既に空高く昇った月が、明かりのついていない建物と寂れた設備をぼんやりと照らしているだけだった。

事務所のドアノブを捻ると、カギはかかかっていなかった。そのまま扉を開き、中へ。

「おいお前ら、マスクと手袋貸してやるから着けとけ。ホコリの形とかも手掛かりになったりするんだよ」

「……急に頼りになったね」

「つて刑事ドラマで言ってた」

「前言撤回、頼りなさすぎる」

「んだとゴルフ!!」

そう言いながら刑事さんと一ノ瀬さんの二人は机を調べていた。俺は本棚に何か残っていないかと思ひ、懐中電灯を向ける。業務記録や帳簿が残されており、特に不審なものはない。

「ん…何だ、これ?」

「晶、何か見つけたのか?」

声が出た方に目をやると、先ほどまで部屋を見回していた晶さんがくすんだ瓶を手に持っていた。

「何かあったの?」

「いや…この瓶なんだけど、中に何か入ってる…石?」

「取り出せる?」

「うん、いける…やっぱり石だ」

そう言つて晶さんは石をつまみ、月光に透かす。色がくすんでいてほぼ黒っぽいのが、輪郭が青みがかつているので宝石の類いなのだろうか。

「何かわかるか?晶」

「いや…少なくとも、こんな石は見たことない。でも手掛かりになりそうだ」

晶さんは再び石を瓶にしまうと、大切そうにポケットに入れた。

さて、再び本棚に何かないか見てみる。よく目を凝らすと、資料と資料の間に何か本のようなものが挟まっているのが見えた。引つ張り出すと、それは英語の書籍だった。何と書いてあるのか読めないのて一旦保留とする。

その隣に『5/2:マーブル大聖堂』と書かれた比較的新しめの資料があった。

「えーと、何々…これ、取り壊しの資料か」

開いてみると、どうやらこの辺りにある聖堂を取り壊した際の作業記録らしい。

それは5月2日から続いており、初めこそ普通の作業記録らしいも

の、目を追うごとにその聖堂から見つかった『青い御神体』についての記述が増えていった。

「えっと……『5月7日 御神体の青い毛皮の一部を切り取り工芸品として売りに出したらかなりの値がついた』…って、やっぱりか！」
やはり、あの青い毛束はこの工業所が売り出したものだったのか。しかし、読み進めてゆくとますます謎が深まるのがこの『御神体』のことだ。青い毛皮だったり、周りに宝石が散らばっていたりとただの物体ではない気がする。

もう一つ気になることがあった。目を追うごとに、徐々に文章が崩れていつている。接続詞の使い方がおかしかったり、文章の不自然な箇所にはひらがなやカタカナが混ざったりしているものもあった。俺は薄気味悪さを感じながら、最後のページをめくった。

「なん、だ…？この文章…？」

それは最早気味が悪いを通り越して、おぞましさを感ずるものだった。

『ゴ月 日

オドロいたコトに、ワタシたちが見ていたものはホンのイチブだった。サイ壇を取りハラウト床シタまでキョダイな本体ガ……

アレはいやアノ方はカミサマだ。ウツクしいジツにウツクしいアレガメをさま

昨日の昼ご飯はカレーだったな。』

ページの下には、何か青い液を垂らしたような跡が、点々と続いている……。

俺は震える手で、ページを繰った。

『そとがきれいだ はやくめざめたい』

「……うつ、うわああああつ!？」

情けないことに、俺は叫び声をあげて資料を床に放り出してしまっ

た。あんな日記、ゲームの中でしか見たことなかった……まるでゾンビ映画のようだ。

俺の叫び声を聞いた皆が、本棚の前へと寄ってくる。

「……大丈夫、高山くん？」

「うっわー趣味悪い日記だなーコレ。後で燃やしとこ」

「……この本は」

メアさんが机の上に置かれた本に気がつく。そして懐からメモを取り出し、何度か見比べると「こんな所にあつたのか……」と呟いた。「ど、どういうこと……？メアさん」

「この本のタイトルをよく見ろ。英語で『宝石を生む神様』と書いてある」

「あー、そういやさつき机で見つけたメモに『宝石を生む神様 5/1 5まで区立図書館へ返却の事』って書いてあつたな。」

「やっと見つけられたね……どんな事が書いてあるの？」

「少し待っている……奴に聞く」

そう言うとメアさんは携帯を取り出し、どこかへ電話をかけ始めた。やがて電話に出たのは一人の男だった。しかし、声に聞き覚えはない。

「もしもし、有働か？遅くにすまない。」

「おや、メアさん。何かご用です？」

「宝石を生む神様の原本を見つけた。私は英語が専門ではないので、翻訳して欲しい」

「え!?あの本を見つけたんですか……流石だ」

有働と名乗った男は、メアさんと面識があるそうだった。話を聞くと図書館で会った研究者の男だという。

翻訳には時間がかかったが、おおよその内容は理解できた。

100年程前に、青い涙を流す病が発生した島があつたらしい。それと同時期に、海辺に巨大な青い塊が漂着し、人々はそれを御神体と崇めた。

御神体の周りに落ちていた青い宝石を病人に飲ませると、病気は治った。

しかし、その宝石を摂取した者は今度は脱毛や内出血を発症。原因を究明すると、実は御神体だと思っていたものこそが病気の元凶であり、島民が呪文を使い、御神体を海に追いつ返すと島には平穏が訪れた……。

「……なるほどな、ずつとつかえていた物が一つ取れて、良い気分だ。感謝するぞ有働」

「こちらこそ。では失礼します」

俺はしばし黙考する。石を摂取、内出血や脱毛……？

「……ひよつとして、アスベストみたいなものなのかもしれない」

「何だそれ？新作のベストか？」

「そうじゃなくて、日本では石綿とも呼ばれてるんです。昭和の時代によく使われた建材なんですけど、吸い込むと肺がんとか内出血を発症するとかで、今は規制が掛かってる物質なんです。こういう工場だったら、似たような素材を扱ってても不自然じゃないかなーって」

「……ふむん、高山の予想は良いところを突いている。この症例ならば、アスベストというより放射能による被ばくが近いかもしれないが」

「高山くん、頭いいんだね。意外と」

「この間、歴史の授業で聞いたから……外れてたけど、ヒントぐらいにはなつたかな」

メアさんが再び本を拾い上げると、ぺらりと最後の方のページから何か落ちた。メモだろうか。

「…何だろうこれ？『渦潮の子守唄』…？」

「高山、見せてみる。…ふむ、これは呪文の類のようだな……。私はオカルトが好きなんだ。こういうのは得意だぞ」

「じゃあ、それはメアさんが持った方が良さそうだね」

事務所の中をあらかた調べ終わった所で、徒那から支給された端末が鳴り響いた。

「経過はどうなってる？原体の有り処は分かったか？」

徒那の声の奥から、波のような音が聞こえる。それに、声も少し反響している気がする……奴はどこにいるんだ？

俺たちは顔を見合せた後、結局情報を包み隠さず伝えることにした。

「…はい、汐留工業所という所でそれらしき記述を発見しました。原体は——恐らく、マーブル大聖堂というところにあると思います」

「……………。フツ。フツ…ハツハハハハ！なるほど、ご苦労だった諸君。これで原体を研究して治療薬を作れるだろう。勿論、君達には優先して治療薬を投与しよう」

「パスワードは、そうだな…阿曇君のチョーカーに送るから確認してくれ。ではご苦労」

徒那はそう言うと、一方的に電話を切った。

「何で俺なんだよ！俺見れねーだろ!」

「刑事さんは動かないで。今パスワード見てる……か…ら…」

一ノ瀬さんの声のトーンが、なぜだかどんどん落ちていく。俺たちもチョーカーに表示されたパスワードを見る。

「パスワード：1702—3905」

「コノ パスコード ハ」

「イチドダケ ユウコウ」

「ニユウリヨク サレナカッタ ホウハ」

「エイキュウニ ハズレナイ」

「サヨウナラ」

そこには、信じられないような文言が表示されていた。

これはつまり、誰か一人だけを助けて、他の皆は最悪助からないかもしれないということ。

「おい！何だパスワードは!」

「…パスワードは、1702—3905…徒那のケータイ電話番号の下8ケタだった。でも、一回だけ有効で、入力されなかった方のチョーカーは、永遠に外れないみたい」

「は？ふざけてんのか…あの野郎」

唐突に突きつけられた命の選択。この5人の中から1人、選ばなければならぬのか…

初めて会った時みたいに、沈黙が場を支配する。

どうする。誰のチョーカーを外せばいい。

ここで誰のチョーカーも外さないという選択肢もある。しかしそれでは、もし全員が死亡してしまったら誰もこの問題を解決できなくなってしまう。

頭の中で考えても、答えは出なかった。

「……ねえ、これは私の推測なんだけど」

沈黙を打ち破ったのは、一ノ瀬さんだった。

「皆、青涙病にかかったって言われたけれど、やっぱり何かおかしいよ。だって、私たちこの原体なんて見たこともないし、接触もしてない。体調がおかしくなったのだって、このチョーカーを着けてからな気がする。」

「確かに、そうだな……」

「このチョーカーをつけたままって事は、私たちの命はあいつの掌の上って事。もし誰も外さなくて、皆死んじやうよりは、誰かが生きていてくれた方がずっといい」

「……うむ。それに、外した所ですぐ死ぬわけではないしな。病気の進行が進む前に治療薬を作れば良い話だ」

「じゃあ誰のチョーカー外すってんだよ」

「病気が進行している私と阿曇は外しても、あまり意味がないと思う」となる……僕か一ノ瀬さんか高山くん……に、なるのかな」

「……私は、高山くんがいいと思う」

一ノ瀬さんは、そこで俺の名前を口にした。

今まで生きてきた中で、こんなにも名前が重圧として肩にのし掛かる経験は初めてだった。

「お、俺……!?!」

「俺もいいぜ。それで殉職できんなら本望だ」

刑事さんが、それに同調する。

「うーん……こう言ったら何だけど、高山君なら頑張れそうな気がするよ。あ、もちろん僕達も協力するよっ!」

「それに、さつきも言った通り、すぐに死ぬわけではない。助かる可能

性の方が大きいかもしれないぞ」

晶さんもメアさんも、そう言ってくれる。いいのか？ただの高校生である、俺なんかに託して。

「…い、今までこういう事って経験したことないから……皆、俺でいいの？」

「決心がつかないなら、高山くん。私たちの命の保証人になって。きつと、ここにいる皆なら、大丈夫」

「一ノ瀬さん……」

「死んだら許さないから。ゴキブリみたいな生命力、見せてよ！」

「あはは…俺、ゴキブリじゃないよ」

「…うん、ゴキブリじゃないね。クマムシかも」

一ノ瀬さんのお陰で、緊張がほぐれた。

大丈夫だ。そうだとも。ここにいる皆は、ただでは死なない人たちだと、俺は思うから。

「うん、俺ならいける。……はあつ、大丈夫、大丈夫だ。頑張れ俺」

「高山声震えてんぞ」

「そりゃあ、そうでしょう…」

「ま、俺は死ぬ気なんか毛頭ねえがな。安心しとけ」

「ありがとう……刑事さん。決心がついた」

「パスコード、僕が入力するよ。」

晶さんの申し出で、俺は後ろを向く。

パスコードを入力すると、チャージャーはカチリと音を立てて、外れた。

——入力されなかった方である、俺以外の、四人のチャージャーが。

第10話：マールブル大聖堂

「なぜだ……言っていたことと違うじゃないか……!」

私は、自身に起こったことを理解できずにいた。

今、誰のチャージャーが外れた?

答えは簡単、高山以外のものだ。

なぜ、彼のものだけが外れなかったのか。それは今考えるべきことではない。

「高山君!大丈夫か!」

「え……なんで。外れないのは私たちの方のはずじゃ……」

「クツソ、こんな時に限って誤作動かよ……使えねーな!!」

今しがた外れた、私のチャージャーを見る。内側に、金属製の穴と、細かい針のようなものが数本あるのが見えた。……まさか。

「……あああ……っ!頭……頭痛え……っ!うう……」

「高山君!高山君!しっかり!!」

「おい高山!俺見えてるか!」

「し、晶さん……?刑事さん、どこに……」

「目も見えてないのか……?とりあえず、バンドナで目を保護しておこう」

高山は既に倒れていて、晶によって介抱されていた。彼の手が、虚空を切る。苦悶の表情に歪む彼の目元からは、まるで青い涙のような液体が溢れ出してきていた。

「夏凜、ステージの確認を!」

「ごめんね、少し見るよ……」。【stage:5】……!?!メアさん、これ……」

「……!」

その時、事務所の外からエンジンをふかす音が聞こえてきた。私達も外に出ると、阿曇のパトカーの横に黒い車が停まっている。その車から降りてきたのは、黒いスーツ姿の女性と、小柄で白衣を羽織った女性だった。

「君らが高山くんとその仲間か!? やつと見つけた……」

「…はわわー！そのお兄さん、青涙病の症状が出てますよ！しかもかなり重篤ですね……」

「この声……外海と桃木か！今、高山が大変なことに……」

「ああ、……ここまで症状が進んでしまったらもう助からないかもしれない……先程も言ったが、青涙病で重篤に陥った患者はクローンと入れ替えられる。クローンの作成は対象者が生きている間にしか行えない。判断するなら今だ。クローンを作るか？それとも——」

外海が言い終わる前に、拳銃の音が一発、響いた。発砲したのは、阿曇だ。彼はドスの効いた声で告げた。

「助からないって言うんじゃないよ。クローンなんざクソ食らえだ」

「外海さん、何とかありませんか？例えば、この鉱石とかで……」

「あー！それですよそれです！治療に必要な、最後のピース!!」

突然、桃木が声を張り上げた。その視線の先には、晶が事務所の中で見つけたくすんだ瓶が。

「少し見せてください……かなり古くなっちゃってますけど、これで即席のワクチンが作れそうです！」

「ワクチンだあ!?!作れんだったらさっさと作れ!!」

阿曇に急かされ、桃木は一旦車の中へ。私は高山に近寄る。

「高山、大丈夫か!?!」

「この声……メア、さんか。ごめ……ちよつと、予想外だった、かなあ……うう……っ！」

「心配するな……私達が、お前の目の代わりになろう」

「あ……りがと……」

私は高山の手を握り、しっかりと聞こえるように告げた。

「出来ました〜！即席で申し訳ないですが、即効性ですの〜！」

桃木が車から降りてくる。その手には注射器が握られていた。先ほどの石を素材にしてワクチン α というものを作ったそうだが、聞いたところだと脱毛や内出血などの毒性は打ち消されているらしい。

桃木が高山の腕にワクチンを注入する。ほどなくして効果が表れたようで、荒れた呼吸が多少落ち着いていた気がした。しかし、まだ目は見えていないらしい。夏凜にチョーカーを確認してもらおうと、ステー

ジは1段階下がって4になっていた。

「……うう、これじゃ完治はまだ難しいか……もつと新しいのが手に入れば……。マール大聖堂に行けば、まだ使える結晶が手に入るはず。」
「それじゃあ、次は大聖堂か……」

「……カタ付けに行くか」

「高山、もう少しの辛抱だ。待っていてくれ」

私達は、これで終わると信じてマール大聖堂へ向かうのだった。



海に向かって吹いている夜風が、私の銀髪を揺らしていた。

マール大聖堂は、海沿いの岬にぽつんと建てられた建物だった。人の気配が全くないが、10年以上放置されている場所にしては窓ガラスも割れていないし、外壁が崩れた箇所もなさそうである。

何というか、不気味な場所だった。

「よいしょ、つと……あれ？これ、錠前だよな？壊されてる……」

「ああん？誰が入ったつての？窓ガラスぶち破りやあいいのに」

「……でもこのガラスは分厚いよ。おまけに位置も高いし……出入口はここだけみたい」

「み、皆……無理はしないでね……」

「君が一番重症でしょうが……。ほらほら安静にする」

晶が背負った高山に声を掛ける。この扉の向こうに、一体何があるというのだろうか……

大聖堂の扉が、開いた。内部は天井が高くなっており、月光が青いステンドグラスを通して床を照らしている。

奥に、「何か」が鎮座していた。それは、青色の毛が生えた巨大な石の塊のような物体。いや、物体かどうかも怪しい。

何だ、「あれ」は……

「う、うう……」

私の頭の中を、今はあるはずのない光景が駆け抜けて行き、思わずこめかみを抑える。

……私のおもいでの中では、兄さんは、とおいところにいる。

また3人で、星を見に行こう——

「やっと思つけた。私の体」

誰かのその声で、我に返った。…今、私は何を考えていたのだろうか……。

後ろから入ってきた人物は桃木だった。抑揚のない不気味な声で何かぶつぶつと呟いており、その目からは青い涙をぼろぼろと零しながら、祭壇にいる「何か」に近づいていく。

「も…桃木……？」

桃木はふらふらと近づいていくと、やがて糸が切れた操り人形のようにその場に崩れ落ちる。そして彼女の体は徐々に萎びてゆき、そのまま枯れ木のように干からびてしまった……。

そういえば、彼女は青涙病に感染していると聞いた。もしかすると、これが感染者の末路なのか……

そして、桃木の声に共鳴したかのように、奥に鎮座する物体は「目」を見開いた。

「な、なんなんだあれ…?!とりあえず高山君を安全な場所へ……」

「…わからない。けど、ヤバそう……!」

「何だろーがとりあえず撃つ!!」

「…来るぞ、皆! 衝撃に備えろ!」

目の前の物体——いや、「化け物」は名状しがたい音を発すると、体中に空いた穴から青みがかった風を巻き起こした。その先には、阿曇の姿が。

「刑事さんっ!?!」

「…チツ、やべえ…っ!」

得体の知れない風が阿曇の体を襲う。彼は膝をつき、その場に崩れ落ちてしまった。夏凜が駆け寄り、チョーカーのディスプレイを確認する。

「ステージ、1上がってんじゃん…大丈夫なの……!?!」

「これぐらい何ともねえーよ……目ヤバいけどな」

「刑事さん、下がっててくださいー！……効くか分からないけど、当たれっ！！」

晶が一步前に出る。どこかから拾ってきたのであろう大きめのナイフを取り出すと、化け物に向かって投擲した。

ナイフは化け物に向かって一直線に飛んでいった。しかし、あの化け物はそこに確かに居るはずなのだが、ナイフはまるで霧を通り抜けるようにすり抜けていった。

「ナ、ナイフが効いてない…!?!」

「はあ…!?!おいバケモノ!!えーテメエは完全に包囲されている！おとなしく投降しやがれアホカス雑魚!!!」

阿曇は拡声器を引つ張りだし、ハウリングさせながら叫ぶ。しかしその呼び掛けも虚しく、化け物は微動だにしない。

何か……この化け物を退治できる方法は、ないのか……!

「メアさん！早く、あの呪文なら効くかもしれない……!」

「…そうか、もしかしたら……!」

夏凜のその言葉を聞き、懐から一枚のメモを引つ張り出す。『渦潮の子守唄』と書かれたそれは、私も見たことのない呪文だった。しかし、今はこれに頼るしかない……!

早速、呪文を手順通りに読み上げる。効果が現れるまで時間のかかる術式らしく、かなり集中をしないと成功させるのは難しそうだ。

「だが…私ならやれる……!」

「メアさんっ、これ以上は……!」

「弾丸全部消費する勢いで撃ってやるよ!!おい一ノ瀬！バケモンどこだ!?!」

「真正面に、いる……!」

仲間が、化け物を引き付けてくれている。

この窮地を乗り切れる呪文を成功させられるのは、私しかないんだ——!!

「…う、うあああああああつ!!!」

私が、渾身の叫びを上げた瞬間。

今にも攻撃に移りそうだった化け物の目が、徐々に生気を失ってゆく。そして最後には閉じられてしまった。

全身の力が入らなくなりそうな程の疲労感が私を襲う。しかし、まだ倒れるわけにはいかない……

頼む、頼む。持ってくれ、私の体……！

「…化け物よ、海へ……海原へ向かうんだ……！」

私が念を込めると、ずる、ずる、と巨大な青い体躯が下がってゆく。化け物は果たして、海の方へと下がっていきそのまま海中へと姿を消した。

もう、意識の糸が途切れそうだ。辛うじて気絶することはなかったが、私はその場に崩れ落ちてしまう。

「メアさん!!大丈夫!？」

「この疲れくらい、何ともない……が。少し、休ませてくれ……そうしたら動けるようになるだろう」

「…退けたけど、被害は大きいね。刑事さんも悪化しちゃったし、桃木さんも……」

「俺は……問題ねえ。それよりもワクチンだ、高山やべえんじやねーの」

彼の容態は、未だに芳しくない。容態を診ていてくれた外海に聞くと、早く治療薬を投与しないと長くは持たないらしい。

「……そういえば、桃木さんが使えそうって言った素材、これのことなんですかね」

晶が、化け物が鎮座していた祭壇の近くから結晶のようなものを持ってくる。色こそ違えど、あのくすんだビンに入っていた石と同じ物質だろう。

「とにかく……この結晶があれば、全員分の治療薬は作れるはずだ。君達にはもう時間がない、研究所に掛け合ってみよう」

外海の声色は、冷静だった。

しかし、冷静さの裏に隠された諦めを、私は見逃さなかった。

この女は、何か企んでいる……？

「貴女は……なぜ、そんなに諦めた目をしているのだ」

「……！ 気づかれてしまったなら仕方がない、これは君たちにとって酷な決断となるだろうが……心して聞いて欲しい」

外海は決心したように高山を一瞥すると、口を開いた。

「彼は……私の見立てだと、持つてあと1日だろう。このまま苦しませるより、彼のクローンを生成した方が……君達にとつても良い選択なのでは——」

「ふざけるな」

外海が言い終わるよりも前に、私は言葉を遮っていた。なぜそうしたのかは、分からない。しかし、この2日間を共に過ごした仲間として、彼自身を見捨ててはならない……そんな気がした。

「都合が悪くなったら全てなかったことにするのか、お前らは。その高山という人間が生きてきた今までの旅路を。証を、姿形が同じ人形とすり替えることは、私が許さん。なかったことには、してはいけないんだ」

そしてそれは、他の皆も同じで。

「……アンタが政府の人間じゃなけりや今頃脳天に風穴ブチ空けてたところだわ、感謝しろよ」

「僕も、クローンにだけは反対です。そんなうちの兄が聞いたら何て言うか……命に対する冒瀆ですよ、それ」

「高山くんは……こんな所で死ぬはずじゃない。だって、しぶといから。彼」

私達の言葉が響いたのか、外海ははっとしたように顔を上げる。

「……すまない、考え方を改めよう。協力すると言っておきながら、この態度はないよな……。分かった。最後まで、君達の意味を尊重しよう」

「……う、皆……無事……？」

高山が目を覚ましたようだ。私達全員の声を聞かせて、無事を確認すると彼は微笑んだ。

「……よ、良かった……」

「お前はまず自分の心配をしろ。さて……これからどうしたものか」

「このままワクチン作りに行けばいいんじゃないかね？ 時間ねえーんだろ」

「待つて、皆……まだ、話をしていない相手がいるじゃないか……徒

那、さんが」

「…あいつに話をつけに行くの？でも、高山くんが……」

「俺、は…大丈夫、だから。皆で行こう。場所の見当は……ついでる、ね…？晶さん」

「場所……もしかして、海辺の！」

そこで、晶は思い出したかのように自分のデジタルカメラを取り出す。画面には岩場に隠れたキーパッドのような物が写し出されていた。昨日、ゲームセンターで見せてもらった画像だ。

…そういえば、徒那と最後に通話した時、波の音に紛れて、奴の声が反響していたような……

「徒那はここにいるんだ…！」

「でもこれ金庫のカギみてーに番号入力しなきゃいけねーんじやねーの？」

「番号は……たぶん、チョーカーの解除パスワードと同じだよ。自分の電話番号をパスワードに使うようなずさんな奴だから、きつとそう」

「…では、その洞窟に向かおう。皆、乗ってくれ」

私たちは、すぐさま外海の運転する車に乗り込み、海辺にあるという洞窟へと向かった――

第11話：蒼のカテドラル

マーブル大聖堂がある岬から、ほど近い場所。

海辺にある岩場をたどってゆくと、洞窟がぽっかりと口を開けているのが見えた。

中へ入ってみると、5mほどで行き止まりに突き当たる。

「…そうそう、ここだよここ！昨日来た時のままだ」

晶が懐中電灯で岩壁を照らす。そこには確かにキーパッドが存在した。

パスワードをメモしていた夏凜が、キーを叩いてゆく。

『1702—3905』…つと……！空いた…」

キーパッドの緑色のランプが点滅し、岩かと思っていた壁がスライドして開いた。まさか、こんな所に自然に似せられて人の手が加えられていたなんて……

その先はどうやら階段になっているらしく、晶が先頭、夏凜が阿曇と共に降りてゆき、その後ろを私が高山を誘導しながら階段を下って行く。

「…あの野郎、ぜってえ電話番号の桁数分脳天に弾丸ブチ込んでやる」
「それはやりすぎ。私が手綱引いてあげるから大人しくしてて、目見えてないんだから」

階段を下りきり、たどり着いたその場所は。

そこは、巨大なホールのような地下空間になっていた。地面や壁に蒼い水晶が生え、ところどころから漏れている光が乱反射し壁や天井を蒼く、蒼く染めている——

その光景はまさに。水晶で形成された、蒼の大聖堂^{カテドラル}——

「…なんだか、綺麗な感じが、する……」

「…ああ、とても綺麗な場所だぞ。高山」

「皆、あそこに居るのって……！」

晶が指差す先に目をやると、蒼白く発光している鉱石が山になっている。それらに照らされる周りには、この鉱石の空間に似つかわしくないコンピュータの類いや書類、何かの標本が見える。

それらの前のデスクで、必死にペンを走らせている白衣の男——
徒那だ。

晶が一步前に出て、声をかける。

「…徒那さん、少し聞きたいことがあります」

「ああ、ああ……もう少しで分かりそうなのに……何だお前らか。忙しいんだ、邪魔しないでくれ」

「……オイ、テメエ聞いてんのか？」

「うるさいな……もう少しで、青涙病の感染爆発を起こせる『バイオ兵器』が出来そうなんだ……！」

そこまで言つて、彼は振り返る。

その目は狂気に満ちていた。しかし、全くの冷静。こいつは狂気と正気を併せ持ちながら、多くの人の命を奪おうとしている……

奴は掌の中で端末を弄びながら、邪悪な笑みを浮かべた。

「…その結晶で、何をするつもりだ」

「…ほう、あの状態で起き上がってくるとは驚いた。ステージ5では生ぬるかかったか……？ならば次はステージ6だな。実験では1分と持たずに死んでいる」

「徒那……っ、お前は……！」

「おっと、忘れたのか？私の着けたお前らの首輪はまだ取れては……何!?!」

「お生憎様、あんたのパスワードのおかげで僕たちの首輪は取れましたよ……高山君以外のね……っ！」

晶が一瞬の隙を突き、徒那の手中にあつた端末を奪い取った。

初めこそ余裕だったが、徒那の態度が動揺に変わる。

こいつは、私達の首輪が未だに着いていると思つていたらしい。しかし、今は高山一人が危険な目にさらされてしまつている……!

「…徒那。治療の魔人の契約者として、命を軽んじるお前を——絶対に、赦さない！」

「……と、いう訳で、徒那さん……話を、しに来ました……！」

高山が、私の肩越しに徒那を見つめる。目は見えていないはずだ。しかし、彼の徒那に対する、やり場のない怒りが感じ取れた。

「…クソガキが…！だが、そこのお前にはまだ首輪が付いているだろう！今、起爆装置を起動した。あと3分で、その首輪は爆発する…：…どうする？そいつを見捨てて逃げるか？」

徒那が愉悦の笑みを浮かべた。その瞬間、銃声が一発響く。撃ったのは阿曇だ。一ノ瀬に介抱されながら、徒那を狙っていた。

「…：…チツ、外したか。一ノ瀬、徒那はどの方角にいる」

「…：…2時の方向。あと3cm右」

「了解。次はブチ抜く」

「…：…ハ、ハッ…こけおどしか。どうだ？そこの銀髪。最期の瞬間にそいつを抱きしめでもしてやったらどうだ？」

おかしそうに、奴は言う。人を手玉に取って楽しんでる顔だ。こういう奴には、一発キツイものを食らわせてやらなければならぬ。私は迷わず、高山の首筋に手を伸ばした。後ろから、手を回すような形で抱きしめる。

高山は、精一杯勇気を振り絞り、徒那と対峙していた。私も、それに応えなければなるまい。

「メ、メアさん…」

「高山…：…お前は、強い。胸を張っていい」

「…：…ありがとね…：…メア、さん」

高山の首筋を、ふと見やる。

そこに着けられているチョーカーが、外れかかっている。先ほどスマホを奪われた際、何らかの誤操作を引き起こしたのだろうか…：…

考えるより先に手が伸びる。チョーカーは爆発することなく、ずり外れた。

「え、チョーカーが…：…！」

「…：…受けとれ、徒那。これが、私たちの、命の重みだあああああああつ!!」

外したチョーカーを、徒那の方へ向かって投げつける。ちょうどタイムリミットだったらしく、目も眩むような閃光と爆音と共に、徒那の体が吹き飛ばされた。

「…：…つしやあ!!よくやったメア！」

「メアさん！ナイスです！」

「…今のうちに」

様子を確認すると、どうやら死んではないがショックを受けて気絶しているらしい。

「よつしや逮捕逮捕！徒那…えーと名前忘れた！！殺人未遂でテメエを逮捕する!!」

「最後に一発、食らわせられたね…僕もスカツとしたよ」

「…やつと伸びたね。このろくでなし」

外海も徒那の様子を確認しに来たらしく、吐き捨てるように言う。

「こんな人でなし、当然の報いだな。身柄は警察に預けよう」

「うっす」

「…さて、もうここに用はないはずだ。帰ろう。これだけ鉱石があれば、十分な数の治療薬が作れるはずだ」

「…うん。」

「そうですね。」

「…高山、終わったぞ…私はもう限界だ……すまん」

大聖堂で使った呪文の効果が祟って、私はその場に仰向けに倒れる。だが、これは気持ちのよい疲れだ。全てをやりきった後の、心地のよい疲れ。

「…やり過ぎたな、私も」

「メアさん、大丈夫!？」

「晶…心配するな。あと、肩を貸してくれると嬉しい」

私はもう体力が限界に近い。だから、高山の介抱は夏凜に任せるところにした。

「……。高山くん。おんぶして、いい？」

「ありがとう……。一ノ瀬さん。」

洞窟から出て、車に戻る。

体は疲れ果て、思うように動かない。しかし、全てを終わらせた安堵からか、窓から流れる、夜の街の景色がやけに綺麗で、眩しく見えた。

車の揺れる音が、耳に心地よい。

周りを見回すと、夏凜も、晶も、高山も眠っているようだ。私も、少し眠ることにしよう……
「星、に——」

第12話：エピローグ

目を覚ますと、俺は椅子に座っていた。

辺りを見回すと、小さな会議室のような部屋で椅子が設置されており、俺の他にも何人か座っているようだ。

姿を見なくてもわかる。晶さん、刑事さん、メアさん、一ノ瀬さん……それに、俺だ。

不意に、目の前の大きなスクリーンに明かりが灯る。映し出されたのは、見覚えのない男性——ではなく、どこかで聞いたことがある声の、女性の姿だった。

「やあ、目が覚めたかな。……高山君は、会うのは初めてか。私は外海。政府でSPをしている者だ」

「外海さん……では、あなたが皆をサポートしてくれたんですね！」

「そいつはお前をクローンと入れ換えようとした女だ、安易に信じるんじゃないぞ」

「刑事さんは黙ってたほうがいい。外海さんのお陰で助けられたのも事実なんだから」

外海さんは俺たちを見回すと、眉根を下げて話し始めた。

「私も忙しくて、こんな形で礼を言う羽目になってしまい申し訳ないが……本当にありがとうございました。」

「そして……君達には青涙病の治療薬を投与しておいた。もう症状は消えているだろうか？」

言われて気がついた。四肢が動かないとかもないし、目も完全に見えている。

俺は青涙病が悪化し、一時は死の淵をさまよったのだ。今振り替えてみると身の毛もよだつような恐ろしい体験だったが、あまり現実味が無い。

「治療薬の副作用でしばらく体調に異常があるかも知れない。だが、後遺症は無い事を保証するのでそこは安心して欲しい。また再発してしまった時は、私を頼ってくれ。」

「本当に、ありがとうございました。外海さん」

「……長い間、よく頑張ってくれたな、高山。お疲れ様だ。どうか、皆ゆつくり休んでくれ。それでは、縁があればまた会おう」

外海さんがそう言うのと、スクリーンの灯りが消えた。スピーカーも、音を発しなくなる。

俺はみんなに向き直ると、改めて頭を下げてお礼を告げた。

「皆、本当にありがとう!!俺を命をかけて救ってくれて……うーん、何て言うか……言い表せない気持ちでいっぱいなんだけど、すごく感謝します」

「……ハッ、あつたりめえーだろ。この天才刑事サンに任せておきやあ事件解決なんてお茶の子さいさいよ」

刑事さんが得意げに言う。この態度も、2日間で慣れたものだ。

「この2日間、すごく充実していたな。死の淵をさまようのはもう二度とご免だが、お前達と知り合えて、良かった。よい土産話が出来たぞ」

メアさんにもすごく助けられた。俺がクローンと入れ換えられそうになった時、彼女が言ってくれた言葉が今でも耳に残っている。俺は俺自身。なかったことにしてはいけない——うん、すごく心に染み込んだ。

「僕も、この事件を通じて皆さんと仲良くなれました。……そういえば、高山君と一ノ瀬さんは同じレストランで働いてるんだったよね?…良ければ、今度皆で行きたいなあ……なんて」

晶さんはみんなと関わるための糸口になってくれた人だ。この人がいなくなったら、俺達の関係はギクシャクしたままで、俺は最悪命を落としていたかもしれない……

「……いいね、それ。店長に話してみるよ。団体客が来る、って」

一ノ瀬さんも、この事件がある前は距離が掴めなかったけれど、今は少し近づいたかも。これからは、上手に接することができる。気がする。

「それでいいよね?高山くんも」

「……え、あ……うん!皆来てくれるなら、俺も大歓迎だよ。」

俺たちは、一連の騒ぎの元凶を排除した。これまで青涙病に罹った人や、桃木さんは戻ってこないかもしれない。クローンの事実が世の中に公表されれば、大荒れするだろう。

それでも、「俺」は。「俺自身」は。今日も生きている。

今は、夏休みだ。

今日も空は、蒼くて高い――



「……………暑つついな…今日何度あるんだろ」

俺は、バイト先への道を歩きながら、そんな事を考えていた。

あの事件から、1週間が経っていた。あれから、青涙病について目立った報道はない。国民健康診断も、いつの間にか無くなっていった。

今日は、バイト先に晶さんとメアさんと刑事さんが遊びに来る予定だ。あの事件を乗り切った5人として、俺と一ノ瀬さんも今日は特別に参加できる事になっている。

……………もつとも、午前中は普通に仕事だけでも。

「……………着いた着いた。さーてと、今日もウェイターになりますか!」

俺は裏口の前で少し伸びをし、赤いフレームの眼鏡に掛け変える。見られてたら恥ずかしかつたけれど、誰もいなかったようだ。

ふと、空を見上げると今日も高く、澄んでいた。

俺は、自分の腕に触れる。『自分自身』に感謝しながら、今日も生きてゆこう。その喜びを、噛みしめながら。

「おはようございませーすー！」

俺は挨拶をしてドアノブを回し、通用口の扉をくぐったのだった。